

本質元廣町
尾張屋

成田叅詣記卷三目次

船橋船橋意富比神社 日蓮上人木劍 同神息劍
 三山三山村明神社 千葉七郷考
 井野井野村加賀清水 宗徳寺 所藏古劍 原胤安墓
 白井故城址 太田圖書墓 八幡社
 淨行寺 原氏所寄日蓮像 經文机識
 神明社 蓋田
 長福寺 古鏡 白井故城圖
 下野牧



門ル品
時 336
卷 3

成田参詣記卷三

意富比神社

五日市場村と九日市
土人神明と称し社領五十

石

天正十九年
延喜式神名帳小葛飾郡二座
意富比神社と此神の事なり

社の傳小天照皇太神豊受皇太神宮八幡宮春日明神と合殿小祀なりと云

神鳳伊勢大神宮造督遷宮
二所大神宮御領諸國神戸御厨神田名

田等合下總國相馬郡御厨
内官上分布五十段口入百段雜用布百段外官
夏見御厨

速山形御厨葛西猿只御厨
百八十丁新萱田神保御厨

合五所あり
或云夏見厨今の夏見村の地なり

東西二ツあり古へ伊勢の神領あり所縁あり太神宮と祭り今社

村新御代川氏住宅地の傍小社ありあり御厨の地を祭りとし神明と号せる社記不其後夏見より今の

地小移せりと見え又所藏文書を天照太神と記を社に必意富比社とは

異なり古より意富比神社へ合せ祀り此社の社領あり絶

た社と神厨に事ふ付神明の方の社領の事あれは神明と心得らるん
或書小伊勢と朝日官と一存官と夕日官と稱はと云ふるは見行本
三代實録延喜式未だ意富比字にイフヒと傍訓あり附會せらるる
大平乃辨神あり意ハ
才の假字なりと澄す

○三代實録小貞觀五年五月廿六日戊子授下總國從五位下意富比
神正五位下此前小從五位下を授らば十三年四月三日己卯授下總國正
五位下意富比神正五位上十六年三月十四日癸酉授下總國意富
比神從四位下と見ゆ

○黑河春村云帝王編年記小仁壽元年正月官符曰五畿七道諸國大
小神祇有位更增一階各位新叙六位と見え文德實錄畧同貞觀十六年小從四
位下又大倭社注進狀小新國史曰寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉
授五畿七道諸神三百四十社各位一階とあり時從四位上と次第に昇
階し給ひなり其後なり天曆六年永保元年或永治治承四年元曆

元年建治元年等も天下諸神増位の事見ゆれ今もハ從二位下なり
一々なりと云

○駿河國安倍郡上田村わらと云う此村に大井神社あり大井川通り此村
と始なり志太郡益津郡此村に大井神社を祭なり大井川の名も

此社なり祭神姫大神罔象女命埴安姫命なり云駿河新風土記益津郡
村小大井神社あり祠官大楠若狭ト云祭神詳ふらば社傳小ハ此社も罔象女命なり

外所なり小祭なり延喜式又風土記小見之なり神階帳小志太郡大井
三島河子神社なり何社の郷に神となり小やなり洋なり

○神領船橋六郷と稱せし地高根村米崎村七熊村下飯山間村金杉村夏
見村都て六村なり後猶後小見のなり按中右顯社に神領大社十二郷小社六郷と見ゆ

天正清和府なり由緒あり寺社なり神領の上先領地頭なり文書なり御朱印なり
此郷に郡郷統属を多く和名抄と符合せりなり今この郡村と目考なり昔八間遠あり

と心得るは古くはまよとよく弁へすはゆかり由緒ありて御印と所持するものへ於更心慢倉と
 こと寺社私伝小執も特恩のやうふ云々とも古文書など照し合てよく考へた必先蹤
 小因ら多陪の舊規ふ違ふを給ふて愛憎ふまきせたる御印は露さるりもなかりし事
 なり白と尋ん人々心湯て一所の私伝ふらば所高徳の物不偏たるはと舎はし
 記載すんま
 ことなり

○正月十六日此神事二月卯日此五穀祭四月十七日初負脊の神夏齋藤氏云
初穂稲のう

つりなとと新嘗 九月十九日角力此神事阿り是月の二十日ハ大祭事ふて其
 まなつた古雅なり猶小祭数多しと云祠官富氏被官の社家四氏あり石上
 千葉官野小中井おたり慶

長十三年御造嘗奉行伊奈備前守忠次此地小御殿と嘗建せり
 上総東金地方へ御放鷹此時の事なり
 後セ ○以下黒河本村より墨多鈔別録と摘抄をさし
 り取捨と加えしとより原書と少く相違せり

日蓮上人奉納木劍



九寸九分

同 神息劍

一尺二寸七分



應永三十年鈔本劍工傳云神息元明天皇御宇和銅元年作八寸五分刀也
 宇佐宮住人之銅才工行平賀也他人
 又云うさのまち修へいせいてんさうははつさ成つさほろけんおさう作也八寸
 五分百うさいをんういすをやうととらう

同瓦製象狛犬



同臺底



菅蓋裡書
 此師子象御日
 号御判高祖
 上人、相違無
 之者也
 中山 日利

皇代記下長曆三年己卯五月十九日有伊勢奉幣有震華宣命被奉金
 銀師子狛犬 百鍊鈔卷十建久六年五月廿日貴布祢社立國司堀出金
 獅子一頭事於殿上被議定云
 或云隋書輿服志中二辟邪ヲ殿庭ニ置タルコト見エ印鈕ニモ用ユル類スヘテカラ
 様ヨリノ習ナリ
 五寸五分

一 下總國船橋御厨六ヶ郷
 田敷之事

- 一 六郷本八二百町也
- 一 東船橋百六町六田大
- 一 西船橋九十三町三田小
け内りけ之事
- 一 一七町七田もん 漆郷
- 一 四十二町四田もん 友見郷
- 一 廿三町一田小 今留本

集古十種印章部三
 日蓮上人印 二



文永十一年三月十日與遠藤左衛門尉書所印



意富比神社ニモ元別當アリナルヘシ夏
 見ノ藥王寺ナトニヤ都テ式社ニ神官寺
 ト云寺アリテ必ス藥師ヲ安置セリ猶考
 ベシ

一尺五寸五

- 一 六郷六十町の時ハ
- 一 三十一町 東方
- 一 廿九町 西方は内りけ之事
- 一 八町三田三十分 漆郷
- 一 十三町一及ん十四分ニ及ん
- 一 七町一及ん四十分今留本
- 一 十六町 友見郷
- 一 十五町 堂ヶ孫郷 米ヶ崎
- 應長元年 辛酉十二月廿日

○船橋

色川三中日往昔刀称川其末、松戸のあたりより、その船橋へ、
 りて海ふ入けんと思ふ類聚三代格卷十六道橋事の條小應造浮橋布

○成田參詣記卷三

○四

施屋并置渡船事中下總國太日河四艘元二艘今加二艘とあり太日も大日也以上摘要

轉訛ならむとて此大日と右日に作りあてし太井也此以上摘要

の夜ハ多船登船と思へし利根川に未船橋地一處と云はるけうた思ふ船橋ハ今宿中

小橋とも土橋なる一此ト元ハ船橋とありからん太日河ハ原より大河まで船をたてハ

渡りつゝ見ゆ三代格小渡船四艘ありてても知らるあり此河

後太井と呼改りハ島田宿於大堰川と同名なるを避けしや

式帳類従本小度會山田原造御厨五改神厨止云名号御厨即号太神官

司支云又等由氣官儀式帳類従本小厨屋壹間長三丈廣一丈云吾妻鏡

卷六十七 文治二年三月十二日關東御知行國内乃貢未濟庄召下

家司等注文被下之可加催促給之由云今日到来注進三箇國庄

庄事下總信濃越後合下總國中船橋御厨院御領相馬御厨同前

黑河春村云院御領とありハ寫誤して大神官御領なり院御領ハ事疑

又椽原御厨ハ九條城興寺領とありも倉科庄なり錯乱ハ事疑

船橋六郷ハ高根村米ヶ崎村七熊村下飯山間村金曾木村夏見村等

りといれし文書小據て考ふる東ハ宮本高根米ヶ崎西湊夏見金曾此六郷

なり○六郷本二百町也神風抄右小船橋二百丁とありと見れば兼久

能頃よりハ然りともあり其後六十町減少せしあり○百六町六田大

九十三町三田小大とハ二百四十歩をひ小とハ百二十歩をひ合せて三

百六十歩と一段と也百六町六段二百四十歩と九十三丁三段百二十歩とさて六田三田

おれ田ハ段の借字とて次ハ文小及とて天正十七年高城胤則の文

書小端とてけり但し田字と書る例ハ此餘いまだ見ねらるす此田

の字もタシとも傍へ一吾妻鏡卷九十八小仁田四郎忠常とあり○

廿七町七田と云以下三條合て西船橋九十三町三田小なり○湊郷船

橋ハ舊名なりといふりさもあはるる事とそのみ船橋ハ庄号

の如く六郷小係社号にて地理いと廣く一所とみゆれば社と東西

ふたつよみて東船橋三郷西船橋三郷とせしもの如く一湊夏見

○成田泰詣記卷三

○五

金曾木の三郷ハ西小属、宮本高根米、崎ハ東船橋小属、
 るた、上カミ載カゼたる社家、社説ともあるを考ふ、
 ひたさる時ハ湊郷ハ今ハ海神村あたりまで宮本といふ、
 橋ハシなる、但し社傳ハ宮本の夏見村ありといれど夏見
 郷船橋北小ありて東西二村あり神鳳抄ハ夏見、御厨一名船橋、
 夏見村北小今金杉村あり是なり、見と宮本と別怨をもちふ本文とそとそと
 十四分七町一反、○八町三田三十分十三町一反、
 西方廿九町とあるに合さる、○十六町十五町、
 十一町とある、○米ハ崎今ハ米の崎村なる、
 ○大政官符
 應造浮橋布施屋并置渡船事

一 浮橋二處

駿河國富士河 相摸國鮎河

右二河流水甚速渡船多艱往還人馬損没不少仍造件橋

一加増渡船十六艘

尾張美濃兩國堺墨俣河四艘元二艘今二艘 尾張國草津渡三艘元一艘今一艘

如二 參河國飽海矢作兩河各四艘元各二艘今各二艘 遠江駿河兩國堺

大井河四艘元二艘今二艘 駿河國阿倍河三艘元一艘今一艘 下總國太田

河四艘元二艘今二艘 武藏國右瀬河三艘元一艘今一艘 武藏下總兩國等

堺住甲河四艘元二艘今二艘

右河等崖岸廣遠不得造橋仍増件船

一 布施屋二處 右造立美濃尾張兩國堺墨俣河左右邊

以前被從二位行大納言兼皇太子傳藤原朝臣三守宣備奉勅
如聞件等河東海東山兩道之要路也或渡船少數或橋梁不備因
茲貢調擔夫等來集河邊累日經旬不得渡達彼此相爭常事鬪亂
身命破害官物流失宜下知諸國預木安寺僧傳燈住位僧忠一依
件令修造講讀師國司相共檢校但渡船者以正稅買備之浮橋并
布施屋料以救急稻宛之一作之後講讀師國司以同色稻相續修
理不得令損失

承和二年六月廿九日

一尺一寸

天照大神寄進狀

右下總國葛飾郡六郷之四至

鮎河愛甲ト同シ即チ馬入川ナリ今モ鮎ノ献上アリ古ヘ
鮎河ト云シ名残りナルベシ右瀬ノ右ハ古ノ誤リナラン
矢口ノ邊ニ古川村アリ此ヨリ取レルナルヘシ古瀬河即チ
今ノ六郷川ナリ

▲夏見ニ山王ノ社アリ此社ニ向ヒ左ノ方ニ神
明アリ是元地ナルヘシ社傳ノ宮本ト云
地ト云義ナルヘシ古文書ノ宮本ハ舟橋ト

東限覆官塚 南限海

西限洗河并 杏懸北限石拔路

平滿胤私領國也依由緒有天神宮奉

渡任恒例天下恭平國土豐饒

可有御祈念仍子々孫々不可相凌寄

進狀以件

元年巳四月十六日 平滿胤 園

1尺4寸4分

黒河春村云 餘ハ此頃の作り字々々一社記小慶亡悲切同麩此曰志加

○覆官塚 山崎知雄曰西覆官ハ意富比宮ハ借字々々一ト云リ
△五日市 場の内宮
の地と稱する所小塚あり祠官富氏歴代其墓所
なると云土人金堂と稱す蓋覆官塚なりん

○成田叅詣記卷三

○七

ヘシサテ宮本ト云村名ハ意富比神社
ヨリトレルナルベシ西海神社ニ湊ト云
アリ往昔鎌倉時代ノ船津ナリト云
湊ト云シモ是ニトレルナルベシ今名ノ海神
ハ鎮守海神ヨリトレルナラン或云此村海
夫ニテ海人ト云シラ人ト神ト同韻ナルニ
海神トモカキヤト云
七熊ハ米ヶ崎ノ分リシナルベシ熊ト米大
一ツモノナリ波佐間モ米ヶ崎ノ分郷ナリ
石拔路ハ金杉ト夏見トノ北ニアルコト必
セリ江戸名所図會ニアカサクミチト見ユ
據リ所アルコトニヤ

間小街道を横きりて流る中三尺のりうの小川あり是と洗河とも亀井の太刀洗河とも稱ふといふなり ○沓懸 △祠官某云山野のまに沓掛の地名ありと ○石拔路 未考

○平満胤 按もろ小満胤千葉の正統より千葉介常胤十代孫を名永三十三年六月八日卒 年六十四 常安寺と号し貞胤の孫氏胤の男なりと系圖みねむむさなり ○私領國云船橋六郷ハ満胤の曾祖父胤宗 正和元年三月廿八日卒 代まつハ御厨ふりと祖父貞胤 觀應二年二月廿日卒 父氏胤 貞治四年九月 の時小押領たりけむと此應永六年に至りてもとの如く返すを従たり依由緒有太神宮奉渡とありも右の故あり ○元弘四月十六日 平治元とやうに書る三字ハ後人の入墨なり 宝曆五年小書る 本社の化録にハ承久元とありとつれも時代と古くせんため小はりしらすたるものにて實ハ應永六年なり是ハ満胤の時代と掲馬ふとられあり ○此花押ハ華押譜卷三十五も見え又平西如斯と並載たり以

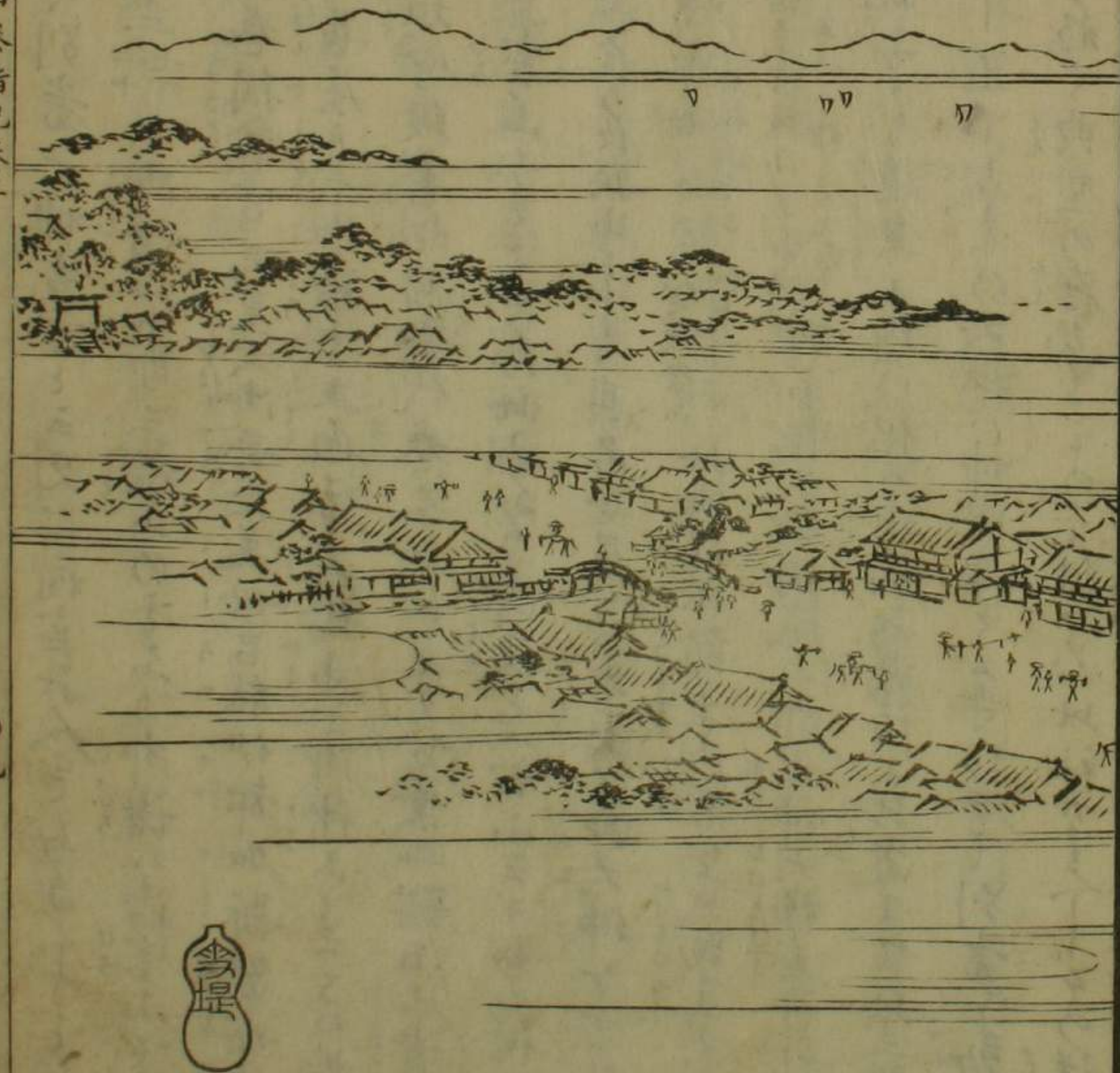
所蔵文書目録

應永廿年六月廿九日神田寄附狀断簡
 文龜四年二月廿七日舟橋云
 永祿三年庚申六月十六日西舟橋九日市場云
 子正月十六日 永祿七年 右於社中云
 永祿九年三月三日右於下總國船橋郷内云
 元龜二年辛未十一月廿六日右舟橋云
 壬申閏正月十六日 右於于船橋云 元龜三年
 元龜四年癸酉九月廿日舟橋六郷之内云
 戊子九月十九日 天正六年 喧嘩口論之事云
 天正六年 戊寅九月十九日自當年於船橋之郷云
 八月十四日 如去年之神明之御町云 天正七年八月廿日長
 正月晦日 如來札改年之云
 天正十二年甲申二月十七日徳政之事御佗言候云
 天正十七年己丑極月十七日八王子免田四端云
 天正十八年卯年卯月七日於下總國船橋之郷云
 元和九年霜月吉日抑奉抽丹誠意趣者云
 霜月六日昨晚者緩云
 正保三年戊夷則念七日今度者何分云
 五月朔日端午之御祝儀云
 三月四日為桃節之祝儀云
 ○茂侶神社ハ葛飾郡三輪山村ハある三輪山明神ナリ此社社領ニ

○成田泰詣記卷三

○八

- 氏繼 △原氏
- 胤縁 △原氏
- 萬榮 △鹿朱印より北條
- 豊前守 △原胤吉
- 胤辰 △高城下野守
- 正木 △大膳亮時茂
- 胤辰
- 胤辰
- 胤辰
- 阿弥道感 △北条上総介綱成
- 胤則 △源次郎
- 胤則 △龍朱印より里見義康
- 田中吉官 △主殿頭北条初定官後
- 鍋島勝茂 △信濃守
- 平後貞胤 △千葉氏
- 秀就 △松平長門守
- 光圀



船橋驛
乃圖

海上眺望

沖くふね

足柄小舟

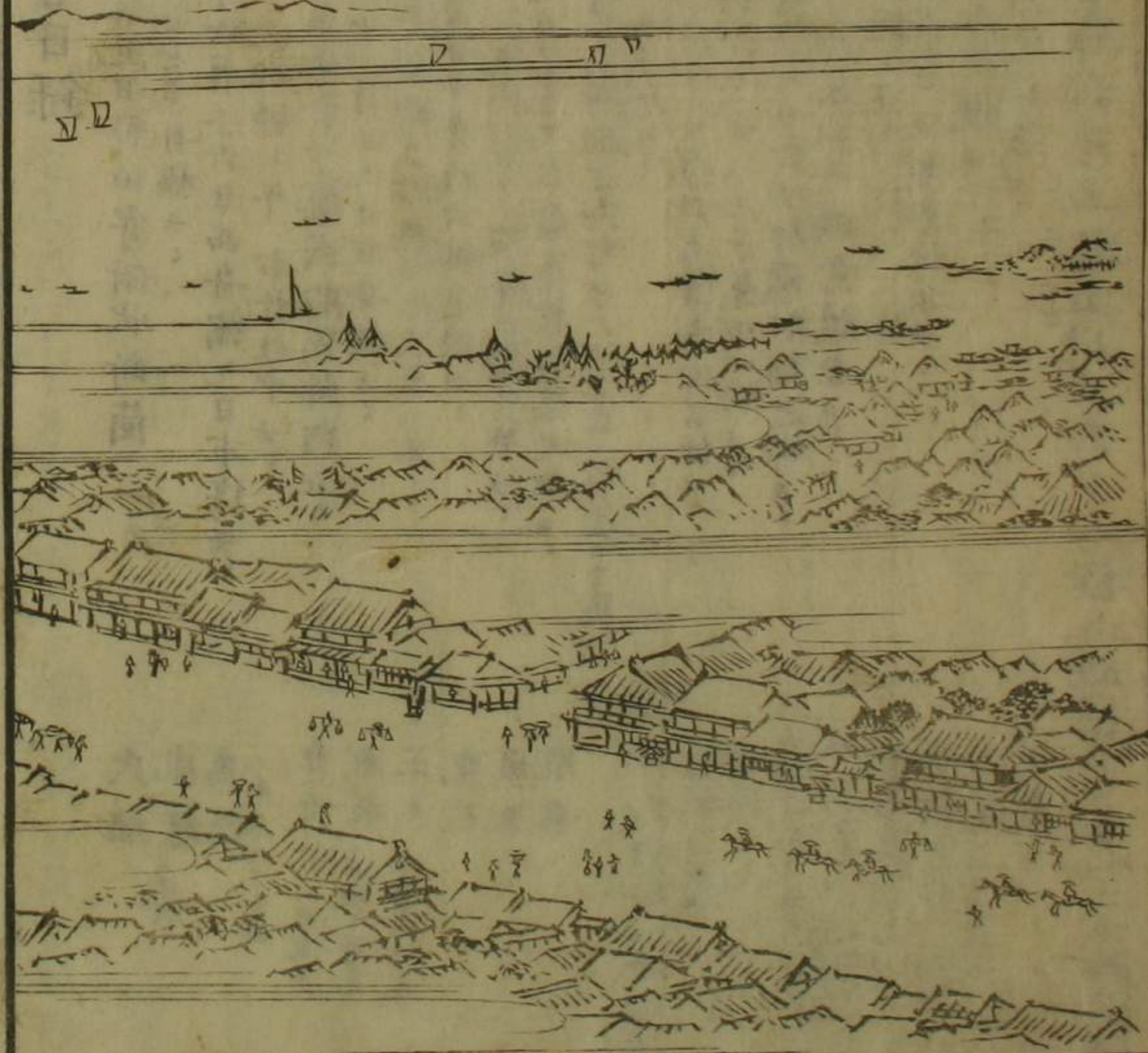
つゝ家船

不社いん

船乃

大江戸

濱臣

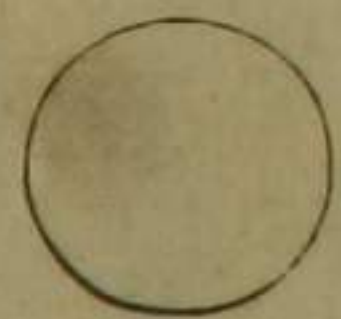


十五石ありて別當と神宮寺と云元は祠官其人ありしと云あり
古事記傳十二二十小沛諸山ハ即三輪山ノとあり沛諸ハ沛宮ト凡天神
此社と云下卷朝倉宮天皇大御哥に美母呂能伊都加斯賀母登云云
万葉三四十小吾屋戸尔沛諸乎立而云三輪山と沛諸山と云るハ此と始小
て中巻水垣宮段書紀同御代卷ふとに見え万葉二二十小三諸之神須
疑七六味酒三室山ナくク免此山ナり沛諸トハ右小云る如く何處小ま
社神社のトなるト此山ノも其名を負るハ取分て此大神と号崇免る
今京にて祭りとスハ賀茂祭山 此沛社小鎮坐沛名と大物主大神と申
今京にて祭りとスハ賀茂祭山 此沛社小鎮坐沛名と大物主大神と申
白橋原宮段小美和之 神名帳大和國城上郡大神大物主神社名神大月
大物主神と始て見えたり 此説小より推考るに茂侶ハ沛諸ハ發語ハ此省ハて此三輪明神
の事なるト凡て古来の大社ハ神宮寺と云寺トりて別當と勤め敷地
木立モ何とナく典型の存スるトそのハ社ハ必此社トなるトその詳ハと

ハ下總式内神社考小見ゆ

○朝野群載三卷遊女記 大藏卿匡房卿 自山城國与渡津浮巨川
西行一日謂之河陽往返於山陽南海西海三道之者莫不遵此路
江河南北邑ニ處ニ分流向河内國謂之江口盖典藥寮味原厨掃
部寮大庭庄也到攝津國有神崎蟹島等地比門連戸人家無絶倡
女成群掉扁舟著旅舶以薦枕席聲過溪雲韻飄水風經廻之人莫
不忘家洲蘆浪花釣翁商客舳艫相連殆如無水盖天下第一之樂
地也江口則觀音為祖中君□小馬白女主殿蟹島則宮城為宗
如意香爐孔雀三枚神崎則河孤姬為長者孤蘇宮子乃令小兒之
属皆是俱尸羅之再誕衣通姬之後身也上自卿相下及黎庶莫不
接林第施慈愛又為妻妾歿身被寵雖賢人君子不免此行南則住
吉西則廣田以之為祈徵嬖之處殊事百丈夫道祖神之一名也人

昔の遊女流名を
 観音と云ふ
 朝野群載不見也



成田

みは莊嚴のうき世
 こころをくれまぬ近
 さころ何大夫ふと
 云ハ謡曲の師より
 轉りてきてこの
 音曲妙なるを
 秘とてからん此
 里の甚は兵衛と云
 緯号ハ何より
 たりふや奇しき
 ふとたりあるなり
 へ

七十一番職人歌合
 三十番

あちさふや名はまするみのいたつらに
 ひくりねあつすよまをあらはけり
 金間竹枝詞
 千金不惜買多情只為娥眉一笑傾
 但使愛才如愛色文人何有不平鳴

蓉鷗漫叟



○成田参詣記卷三

〇十一

別剎之數及百千態蕩人心亦古風而已長保年中東三條院參詣
住吉社天王寺此時禪定大相國被寵小觀音長元中上東門院又
有御行此時宇治大相國被賞中君延久年中後三條院同幸此寺
社狛犬犢等之類並舟而來人謂神仙近代之勝夏也相傳曰雲客
風人為賞遊女自京洛向河陽之時愛江口人刺史以下自西國入
江之輩愛神崎神崎人皆以始見為夏之故也所得之物謂之團手
及均分之時廉耻之心者忿厲之興大小諍論不異鬪亂或切鹿絹
尺寸或分米斗升蓋亦有陳平分肉之法其豪家之侍女宿女下船
之者謂之湍繕亦稱出遊得少分之贈為一日之資愛有髻俵絹緞
之名舳取登指皆土九公之物習俗之法也雖見江翰林序今亦記
其餘而已或云百大夫云ハ男根ノ自ヲ多ク持ヘルカアルトナルベシ但シ百大夫ノミニテハ通シカマルヘ道祖神云ト
云コトヲ注セシナラン又云傍書一條トアルヨリ上江翰林序ナリ下ハ即子匡房卿ノ記ナシト云ヘリ
西光山淨勝寺 船橋漁師町小あり寺領十石 天正十九年 淨土宗増上寺也
辛卯十一月

本尊阿彌陀如來閻基詳寺紋小菊桐三鱗を用ゆ 此條家由緒也 岡山金蓮社頼譽周公上

人 永正三年 中興專譽大朝上人と云 寛永元年三月 廿五日 禪宗曹洞派粟

夏見山長福寺 東夏見村あり 觀音堂領五石 天正十九年 辛卯十一月 禪宗曹洞派粟

原本郷寶成寺末たり 岡山湯蓮上人 田融天皇御世 中興夏見加賀守政芳永

中興人法号瑞興院殿 長福通宗大居士と云 念佛躍と云法今何道倍群集セリ 本尊正觀世音菩薩 由來此寺 鏡藏見 此寺每年二月十六日天堂

○鐘識前下絶國葛飾郡千葉庄夏見郷夏見山長福禪寺者方 田融
帝統御之時上人得蓮救世大師靈感為嚴慈草創之遠挑四明法
燈實為東關台宗之巨擘也嗣後時代寢變數有興廢永祿中夏見
加州刺史政芳法諱瑞興院殿長福通榮大居士慨嘆靈場之將湮
没及就舊址締葺殿宇且割膏腴之地附之招空山和尚董席革教
唱禪相繼順清通法兩首座住焉法首坐與大檀越相議持請能山



社藏古銅鏡

徑九寸

或云此鏡ハ持統天皇ノ時代ノモノト云據アルコトニヤ○社傳ニ千葉家ヨリ源右大将家蒲殿へ贈ル書ト共ニ當社ニ納ムト云

武陵縮寫

藝禪師為之開祖藉是為寶成支流云々下文文化紀元甲子十月吉

日幻住豪徳寮室堅光識

下野牧 二總馬牧の權輿ハ天正度 御南府より此ことをなすは此と明割

と頌を社ハ慶長十九年以來なり 寛政四年改正あり 上野中野下野

と小金と稱ハ内野高野柳澤小間子 取香矢作油田と佐倉と稱ふ別小

印西牧あり都て十一牧あり牧子と稱ふ士凡四十餘名各地小散在は

その長と綿貫といひ小金驛小住セリ 先祖ハ千葉氏の 毎年春秋二度に

官命ありて二歳以上の駒と捕ふ 庶族なりと云 小倉ハ佐倉ハ秋之 清水侯臣ノ流考紀

行菱川氏泰嶺館文集等に其云々こと之

○主税式上凡諸國牧馬不堪貢進者申官賣却混雜皮直毎年出舉

用其息利以充貢馬經國之間及牧馬秣料云云

兵部式諸國馬牛牧下總國高津馬牧大結馬牧本島馬牧長洲馬牧浮島牛牧

續紀文武天皇四年三月令諸國定牧地放牛馬 大寶四年三月

給鐵印于攝津伊勢等二十三國使印牧駒犢

厩牧令凡牧每牧置長一人帳一人每群牧子二人其牧馬牛皆以

百為群凡牧牝馬四歳遊牝五歳責課牝牛三歳遊牝四歳責課各

一百每年課駒犢各六十其馬三歳遊牝而生駒者仍別簿申凡牧

馬牛每乘駒二疋犢三頭各賞牧子稻廿束其牧長帳各通計所管

群賞之凡牧馬牛死耗者每年率百頭論除十其疫死者与牧側私

畜相准死數同者聽以疫除凡在牧失官馬牛者並給百日訪覓限

滿不獲各准失處當時估價十分論七分徵牧子三分徵長帳如有

闕及身死唯徵見在人分其在厩失者主帥准牧長飼丁准牧子失

而後得追直還之其非理死損准本畜徵填凡在牧駒犢至二歳者

每年九月國司共牧長對以官字印印左髀上犢印右髀上並印訖

具録毛色齒歲為簿兩通一通留國為案一通附朝集使申大政官
凡牧地恒以正月以後從一面以次漸燒至草生使遍其鄉土異宜
及不須燒處不用此令凡須按印牧馬者先盡牧子不足國司量須
多少取隨近者充凡牧馬應堪乘用者皆付軍團於當團兵士内簡
家富堪養者充免其上番及雜駢使

○總常日記 此野ハ銚谷上總下總小よりりて横四十里ふたふとそ
其野小十所よりりてやまらうらへん高さ一つふたあまそは土道とつ
まて一ツ園クニ中を又三つふらうといひめてうまを免の本戸をひらさ
牧使三人正使一人 副使二人綾蘭笠といふきて袴さうそくして馬ふまた
うりたはうと野駒のこまとのりまはしはうひたそく本戸をまゝ入てわくの
園小のりり社をそまふはまて野駒とそまうひらういくたひかく
追入て牧使ハ土道のう人なる假屋ふみて弱毛つけあやあえん

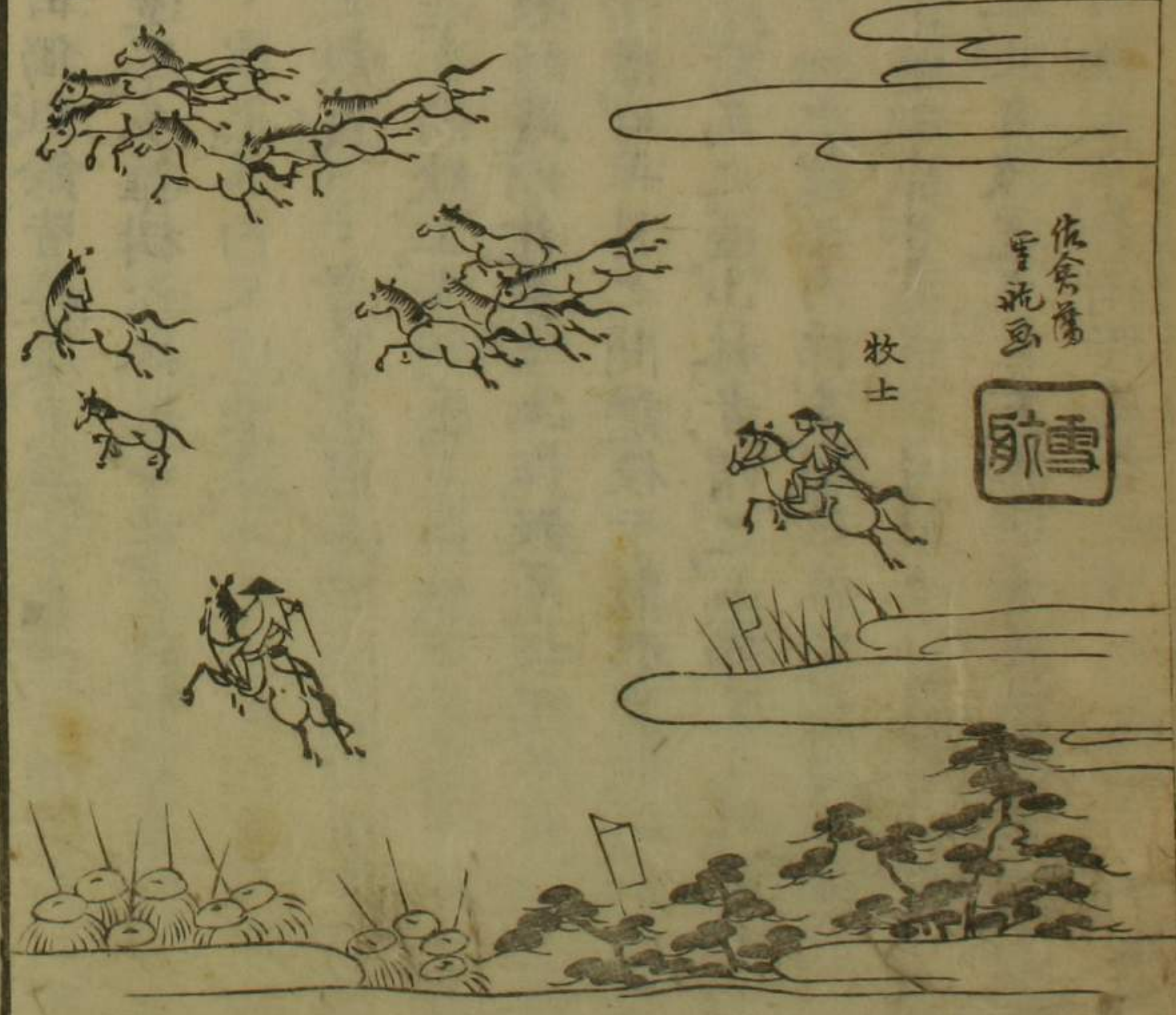
筆とりてまき一ツ事とりて五六足は中のかこひ一入て列車と
もつなをめぐらう一なて駒と中ふとりこめ用ふあたえきふそ牧使
ろ社とさしとふそを待てりりこ社中に長たらたもの一二人
弱のくひふらうへまきを竹杖ふつけもちておひまはし打うと社を一
人はたたらたうきつとてあしあまう一人やう口強とそそそ
引たら四五人そへて引てうこひより十町けり西ふうりり社うまやの殿
免くそあうまはれくありいとあうまう駒ハうひら社ゆとそたらて
藪小積入ヤブとそそ有とううあみの中にあるほもくひつなうら
しとて土道どて伐らえそ途出んとそそをおきの上はうりことそま
む社あてそそもて追たろすこうて五六足中よりそり砂さ
社たろふも用ふあたえう年まうく又ハ素んとくハ用ふあ
たえきなまは焼たしてそそ不用の駒もにつきおこひ

とをらやをり焼印の國形所よりて印をたらうは社り五
六足はくらくはること敷度少てはてた其日てけめ退入を
駒に數六百餘にて用ふあり引たて行く百七十ありな
べーく此大野十所をほくをめりてとることな社を敷あり
たあること思ひやりぬいさましくめはらさみもの
○秦嶺館文集菱川大觀始觀執駒記 余初來江都則聞南北總多曠野
而牧馬蕃庶夏月執駒奇觀也心竊馳焉旋及視佐倉學政增得詳
其說曰城東十里有酒井驛遵路北轉東折而行數里設十字門
謂之木戸踰則為内野一望可方十里又東為高野方二十里又南
且西為柳澤方三十里並處突出若懸疣然謂之入野并是而計
則不知其幾許里以上本藩所管置典牧二員牧師數十人隸焉曰
小間子曰取香曰矢作曰油田地形皆縱長並牧長綿貫司之總稱

之曰七牧就中油田獨阻餘皆接壤東遷東金臺西瀨大和田殆乎
二百里云牧之四邊率多雜樹松林畑中延袤數里築壘周之處
中斷謂之鳥貫、虚也其内又匝壘減半半減之内又半之謂之
溜袋又極小之謂之穀茂、者籠也形如凹字折右角中斷下畫
於内副二一左則連下而缺上右則屬上而缺下是為左右籠各可
容千匹正面土階數級踐以升壘、上作假亭板隔之為三階前方
數十步是捕場也每歲六七月之間課役于數郡蓋調列卒也先期
二日冷傍近村民驅野馬之匿山林者謂之山拂翌日列卒數千裹
糧宿圍四邊逐出于畑中謂之内拂及期典牧駕長黎明輕裝与牧
師數十騎舉鞭縱橫馳騁驅各處成群者哀乎一處既而或左或右
距數十步並之而馳又自後逐之左右並馳者蓋防其旁逸也倏忽
之際自外壘驅入内壘分卒扞衛斷處相繼皆如前次第驅之先聚

下野牧野馬執の圖

佐倉風土記云野駒在狹南者自千
葉野以東至根古名北者酒井以
東至寺臺驥原繼各三四十里風
牧子所官籍其北壯消息之數皆
有屬禁歲之六月吏未執之其執之
處謂之込込凡七處曰内野曰高野
曰柳澤曰取香曰小間古曰矢作曰
油田是也每込三四十歩四圍築防
傍開二門及時刻卒呼喚牧士數騎
馳逆之或百或數十以聚一所而納
諸込乃官吏監臨余牧士簡擇毛物
不可者驅出之可者留之一人竿頭
繫繩纏駒首又一人躍上駒脊急抱
其頸仆之執之尽其込而止矣



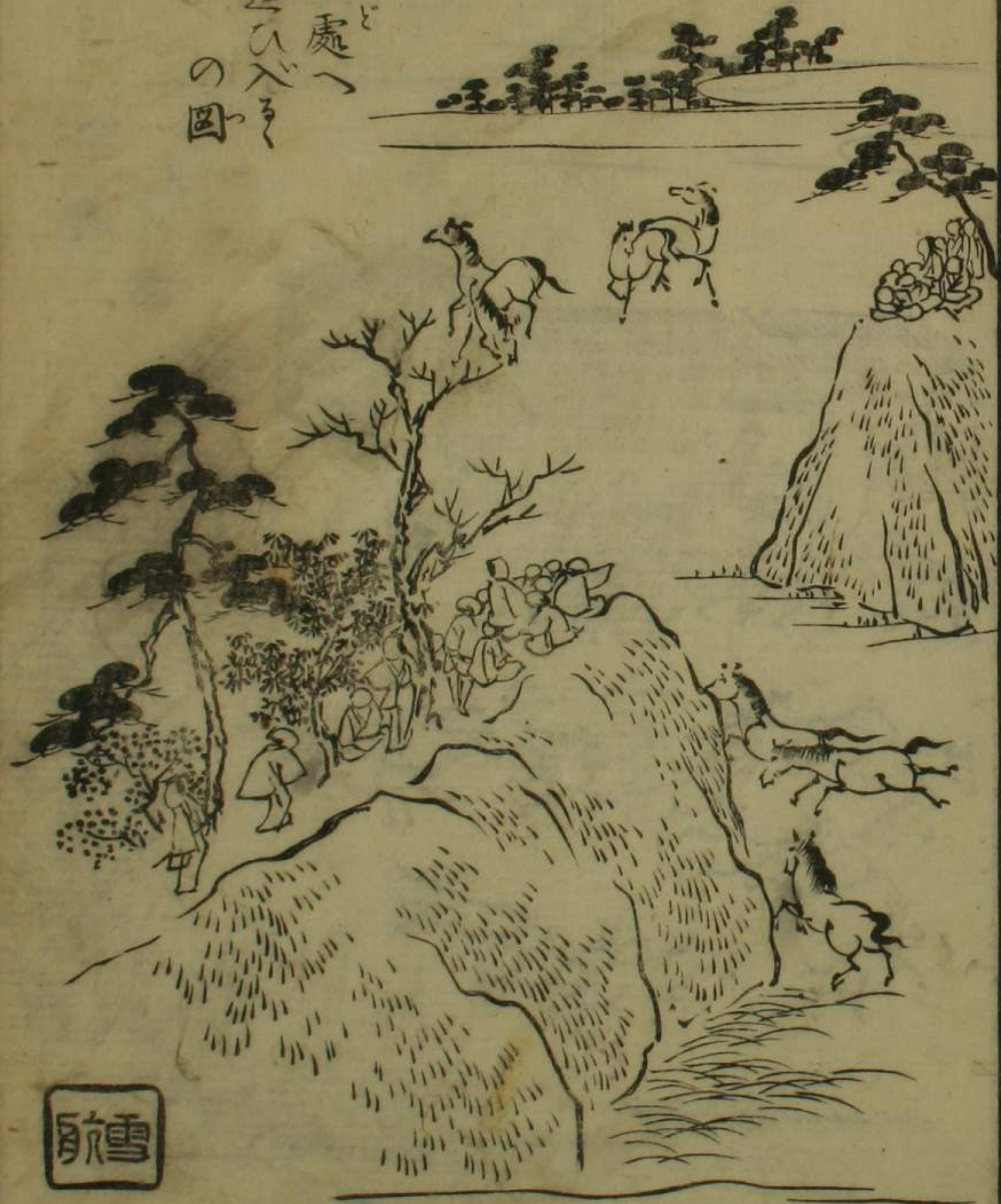
佐倉
風土記
牧士

手ニ持シ竹ハ
三尺許ナリ
小幡へ村々
名ヲ記ス

勢子
人



穿處へ
追ひ入る
の圖



其二



牧士

馬ノ分免ヤ一群皆ナ
其馬ヲ圍繞シ居ル下
一日母子行歩ニ及ニテ
去ト云



其三

込へ退こ
むの因



其四

溪臣



慈常日記
牧はるゝ

と針者

こゝてを

野のひの

めこ末

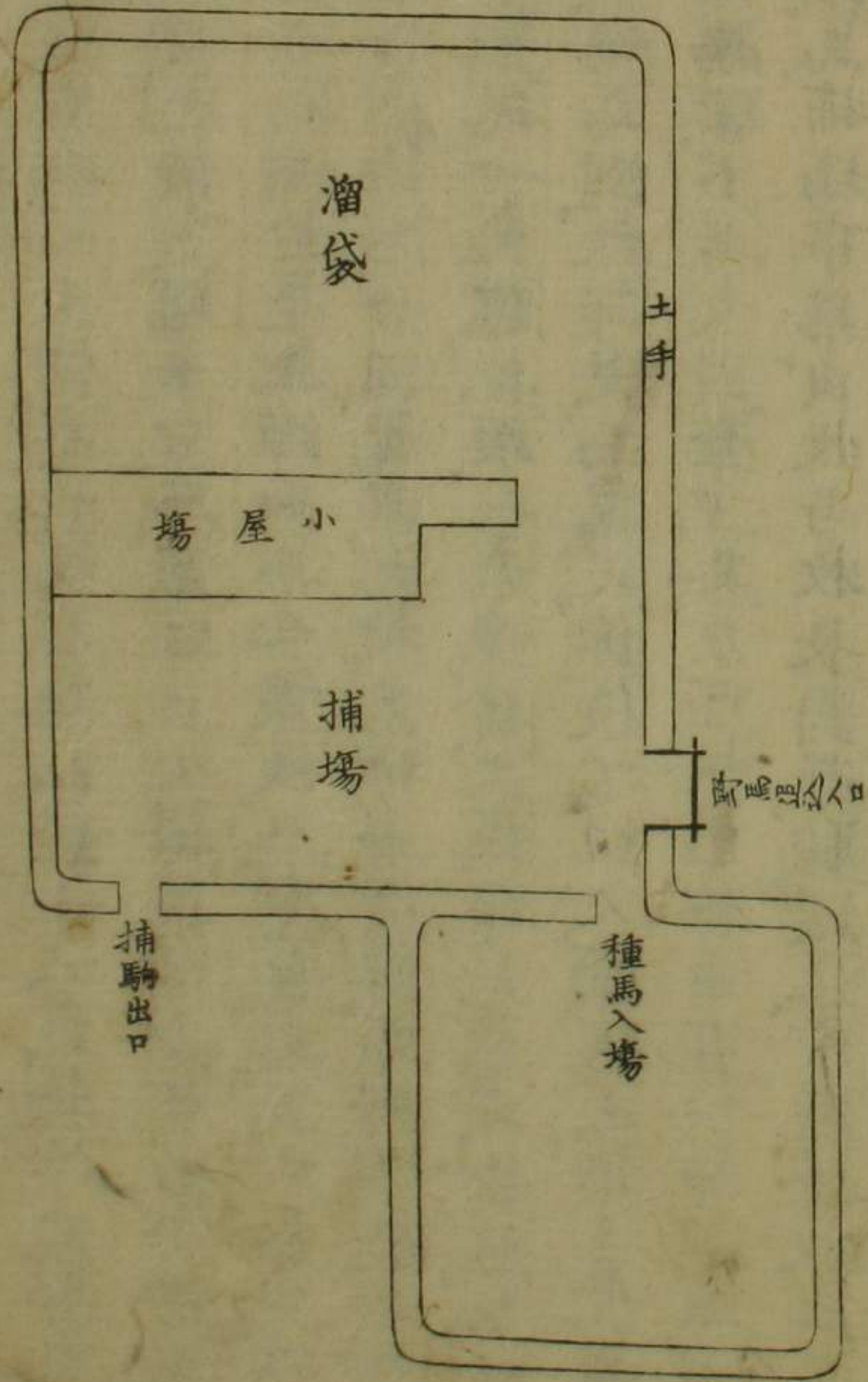
牙赤

わつそ



溜袋ヨリ
一群ヲ出シ
捕馬ヲ殘シ
外ハ皆右入
入之中三捕
スル節左右
ヲ見テ幸
四ハ見テ幸
タタニ啓閉
ヲ分タス

掛綱



下野牧込之圖

烙印牡ハ左北ハ右種馬ハニラ烙ス其印ハ牧コトニ異ナリ

近來進献ノ馬此地方ヨリ出ト云

其五



野馬と引立るの図

一匹ヲ牽ク
人数凡十
人許

雪航

于左籠又驅趣右籠此間典牧既下馬立階左官使至則整折迎之官使一揖歷階先升坐亭右間典牧繼升易服坐中間駕長及鑿師坐左間書手二人侍亭前左右牧師數十人或持竿頭繫索者或剪小竹杖之散立場中分卒塞場口又擇民間有膂力者數人以充捕夫謂之駒倒於是牧師兩三人橫杖入右籠驅五六馬出或北或牡奔走場中持竿者圍視認毛物乘勢飛索絆頭釋竿數卒拾索控之而不克捉一夫躍抱頭一夫僂倚之或攬尾振或衝脇劫數夫戮力相挑與馬倒牧師從而羈之俾役丁四人牽送之酒井强悍者在路猶騰驤不止大困牽丁其力可想已驛中有牧師班頭後園築小壘納馬捕場事畢典牧與牧長對選駿送上官廐每牧二匹次者賜之藩每牧九匹餘咸賣之於民年有增減又或有倒而不羈之點印而放者凡孳生駒馱例取二歲以上按印之官廐下吏二人

代燒鐵印握長柄以點髀上每牧異章其他咸開場口放出任其所之牡謂之駒牝謂之馱者獨充任載之用之義蓋方言也初方馬之出籠牧師一人向亭上高聲呼其色歲駒馱左右書手秉簿記之然後應執者執之應印者印之應放者放之觀者其初踞內壘上以望從外入後則先至籠傍左右攀躋壘上或俯籠或臨場其樂不可言也余晤斯言形竦席間神飛郊外者久之爾後每歲祇役佐倉率留五閱月以乙卯之秋與齋藤翁暨二三子約將往內野有故弗果越數日遂奔柙澤四更起蓐食而發各提燈照途從者一人擔絡尾之出城南經鐫木村而曲折度田徑生路不辨方位具行可二十里而東方稍白又趨數里而入野則宿霧四掩草露沮洳排草躡露步又數里而得一壘踰中斷處而左右望匹馬無所見二三子以謂群既入內壘也促步而進俄頃日出霧露餘青松如膏沐者方覩真景

爽快吐氣不覺又過一壘則數卒衛斷翁曰得矣群萃乎此際宜急倚前壘以逸待勞皆可其策快走進而登壘拭目延望四邊連天杳不知津涯垌中軟草氍布潔泉玉涌林樹蒨葱粧點乎廣野重壘繚繞似常山蛇勢使人有汧隴間想乃眷南方之原若雲之屯若錦之陣與初晰相映晶々炳々蔚々燦々余顧翁曰美哉溶々烏非是河精之颺采則或乾象之騰文也翁未及荅忽然呼色仄聞塵飛煙起衆皆裂眦則數十騎揮鞭矢驚電驅群馬喧嚷鴻驚兔走一瞬猶遲萬蹄重沓既超中斷凜々焉若江河之決堤不遑指毛物辨種類既而群鬣又叢于北壘之下於是小甲指揮遠圍左右與後部分同心列卒蟻旋邑別殊蹄微幟星羅騎者亦姑離鞍藉卉箕踞蓋又休馬足也此間再進而得先憑籠壘則日將隅壘上觀者嗔咽笠摩鞋累少馬復迥傳哄色地響草靡一騎鷗翔掠場口而入左籠謂之端馬

群馬從之須臾充盈籠中寸土靡餘則徒鼓鬣掉尾或張斷高嘶耳弗能翹足跳梁也余與二三子欲品評種類翁曰吁差毛斤形猶且不易矧於別種料才乎姑就陳篇而論之狼尾魚目則毛色也文臂花肩則形相也妍蹄繁鬣則種類也相混難辨若陰唇白顛之屬形或疑于毛色小領遠志之係種太惑乎才性且夫在垌之頌其可指而命者不過驪黃騄駼數品耳今籠中之殊相異態安能究詰也余欲置對不得徒撫空懷而嗟爾於是典收歛容欽行官使至場外降轎子徒步而入迎接之禮捕羈之法咸若前說而或有所睹過所聞者寔可謂昇平奇觀也頃刻籠馬絕減三分之一則既過午暫閉捕場謂之中休亭上下簾而就哺啜同人亦傾榼倒榭或火飯或香瓜各適其所適為間復開場時埃風吹熱炎暉煌々衆皆雖搖寔當之尚苦難堪而乃捕夫賈勇與悍畜挑爭白汗汗血競流染沙竟擒

景行天皇葛飾野少御狩

の圖

高橋氏文云景行天皇冬十月到于上総國安房浮島宮今時磐麻六獵命從駕任奉矣天皇行幸於葛飾野令御猶矣太后大坂媛波借宮御坐磐麻六獵命亦留侍云々

其一



武臣吉進



成田泰詒記卷三



三十一日



其二

名所遊歌集
 一 かの
 かよふふたら
 ちりり
 ちりり
 ちりり
 ちりり
 ちりり
 千蔭



之而罷未設羈金絡月之飾已觀竊轡詭銜之態稍近日昃而又減其半觀者齊張虛勢若不忍放目二三子亦皆壯齡曾無倦色余業已憊老境畏歸途入夜與翁晉議而辭二三子割愛而去投側浮店啜茗幾椀解渴除煩憩息少時而再取舊路步且食烟行可十里易路北嚮度野傍林而走又十四五里而得村落距城尚遐偶認青帘隨量買醉而出一氣呵成入郭及還舍已黃昏揖翁相別浴訖便就寢夢魂猶彷徨于坳野間會如聽剝啄之聲驚醒而呼老奴伴出應門則二三子之告歸也時夜將半余卧不起榻上續殘夢此日寔八月初六明朝夙興記之翁名是芳二三子者服部俊秀竹内保定今井兼方從者乃余僕曰渡五○再觀執駒記上畧按舊志古昔東國有官牧信濃最大歲貢駒八十四匹甲斐次之歲六十四匹上野武藏又次之並五十四匹擇四歲以上應堪用者八月上貢若不中貢者

則充驛馬例以八月望勞貢使于粟田口是曰駒迎所謂望月駒是玄惠庭訓舉信濃駒國風賦甲斐驪馬上野出駿載稗史併可以見其盛於古而衰於今矣又觀或云武藏牧長獨稱別當則所謂武藏野蓋亦坳牧也乃今不聞其有孳生焉而總中不惟前所舉七牧小金原又有三牧曰上野印西高田臺亦綿貫所司也金作又二牧以中下分稱房州又有峰岡並官使監之并前為十三牧於戲可謂蕃昌矣不知武藏之牧何時廢而總中之牧何時興焉方平氏之隆有秩父某永井等別當則牧馬猶存可知已總人或謂源公名馬生食者出自桺澤然據盛衰記則生食磨墨並與人本吉某之所獻而南部之產也東野之語豈足信乎鎌倉以降記載余少槩見且野乘攸錄大抵詳於戰伐而略于制度矧室町之時幕府之令不行關東則事實之欠詳不獨牧馬一件矣按宋史咸平六年四月令河北轉

運副使攝群牧事其後遣判官循行諸監取孳生駒二歲以上點印之歲約八千餘匹凡馬群号十七左右字至退字毛物九十一種叱撥至驃駁嘉祐八年群牧司言孳生監每歲定牝馬二千牡馬四百歲約孳生駒四百以為定數是其為法与令所載大同小異周官曰春祭馬祖執駒此條令不見義解亦不及之也其候不可得而攷雖然舊志載八月貢駒事則執之當在六七月耳而今總中之役亦興於七月至九十月而畢皆異乎周典矣問之士人曰馬陽物也喜寒畏熱如冬春之際强悍難制至夏力衰故本以六月始至今遲一月者蓋自官使監臨以來之例也此言似有理焉又按擬駕用者屬牧師全生息者屬牧人見詩疏所謂牧人即令之牧子也亦今不聞有此職直任其自然牧師時巡野檢毛齒而已然孳生歲蕃息者蓋以水草之善故也則馬政所謂時出入游靡之節以宣其性情分

房棧北牡之別以一其種者反不若任自然之靡勞歟左氏凡馬日中而出日中而入正義云春分百草始繁則牧於坳野秋分農功始藏水寒草枯則還概此周典之制也此等之法不見於今則蓋振古所不率循也但南部仙臺里駒者或有畧似焉邪宋王應麟曰古者牧養之馬有養之官有藏之於民官民通牧者周也牧於民而用於官者漢也牧於官而給於民者唐也國朝始則牧之在官後則蓄之民又其後則市之戎狄余竊以謂本朝古制槩唐典焉依南部之法則蓋類於漢矣總中又雖官牧而不置牧人任自然是其所以異乎歷代也寬政五年朝散大夫岩本君奉特命以親信領群牧使始來臨斯邦先是執駒之役牧師預錄毛色膚第呈之典牧擇其應捕者牝牡并執大夫建議革法不許取課馬爾後歲計孳生倍故云余就典牧質牧馬數曰今年本藩所管三牧捕馬賣民者百五十五

匹而留坳者千七百三十二匹綿貫所司四牧捕賣八十九匹留坳
千四百五十五匹其他六牧坳廣狹馬多寡皆未詳之若以所聞則
並狹於所管三牧而馬亦寡矣由是推之群牧總數不浮五六千匹
耳較之漢唐盛時曾不及五十分之一矣雖然唐之初起得突厥馬
二千匹又得隋馬三千於赤岸徙之隴右監牧之制始於此可見其
始涓々爲而乃用太僕少卿張萬歲領群牧自貞觀至麟德四十年
間馬息七十萬六千可見其終洋々爲故昔人有言汧渭之間未嘗
無牧而非子獨能蓄息於周汧隴之間未嘗無牧而張萬歲獨能蓄
息於唐此得人之效也今總房群牧之地比秦汧渺々則不足較魯
野區々則有餘大夫果有非子萬歲之才邪倍獲什陌之息吾有望
於他日焉若夫克史張說之頌余雖無似敢辭其責哉○牧馬論上
畧談地理者曰本邦雖僻在東斷長補短將二千五百里果爾與三

代所謂中夏之域足抗衡焉而乃今總中群牧之馬不過五六千匹
也其他奧羽等州之牧暨內外閑廐諸蕃之馬亦可推而知耳中畧
按宋史載本邦課丁曰八十八萬三千三百二十九蓋據僧裔然所
對而記也繇是推之當時口數雖多不過三百萬耳寶曆戶籍民口
二千六百六萬千八百三十而大朝暨諸藩士人陪隸並不在此數
見官中秘策據此則今時總數雖少猶及三千萬耳歷年僅八百而
增口殆乎十倍本邦氣運今而日開可知已

三山明神社 三山ハ和名抄の山 千葉郡三山村三山ハ和名抄の山 社領拾石 天正十九年辛卯十月別當祠
社傳ハ素盞男命櫛稲田姫と祭祀りと云毎年八月十三日小湯立
神樂此日祭日とトヒ定め九月の内良日と撰むと云丑未の七箇年
目小取分て大祭事あり祠官と三山氏 外小社家四別當と神官寺と云



三山明神
社の圖



まきの色れ
 沖の古代より
 あらうねり
 土井はくして
 土井はくして
 まきの色

蘆庵



医王山と号し新義真言宗吉橋村常福寺
小属長尊末師如來開基詳なり

氏子村千葉郡とて廿一箇村あり

○神名帳考澄土代伴信云寒川神社儀式帳寒川比女命信友云千葉郡

寒川新田と云所小古社あり今ハ神明と称す社ども式内寒川神社あり

村人の中ふて鑑取と云と撰定て神事小預らむ神体ハ所謂御幣

ふて祭日小新小調へて舊物ハ海に沖へ持出て流るなり此神霊験

著すと常にて云々寒川の奉村よそ神明宮あり社とそそ新田なるを

後小勸請一祭社とそそ文政十五□記

○或傳小此社と茂呂神社なるを云いこのふとそそ古棟礼小茂呂

また茂呂神社再造堂一字成就謹言とありと年号ハ詳ならずと云へといふ神社一字成就所

○或人の説小此地元葛飭郡なるを云元禄中千葉郡少改てあり

と社と元禄中まで葛飭郡小属し左社と千葉庄と稱して元と

千葉郡小地なるを葛飭郡小あらは猶たふ植生郡と香取郡植生莊と稱せ

と同一ことなるべし植生莊ハ舊くは植生郡小地より貞享三年より

舊小復して植生郡と建ら終たなり

○寒川村ハ天正以前までハ結城と稱せし地より此地方ゆふさ結城と今も結城

と稱し結城山万蔵寺と云寺もあり新田ハ向寒川と云所あり此地

小結城明神と稱する社あり信友ハ寒川神社とすハ此と云へたなり

香取私記佐倉風土記ハ寒川神社ハ寒川村小ありと云へたなり

のまを記せしふて共小澄と云へたなり

ありと云定めたるは郷村後世小種々に分合せしとを種一概小論

難し既小本州小松社ハ小松村小あらはして神崎村小あり

地とて社あり故社寒川神社も此社なるを神名帳小相模國高座郡寒

川神社名神とあり

郷あり訓位各加波今三浦郡遠海と
寒川浦と称せりも因あることありん
寒川神社ハ相摸一宮小て祭神素戔嗚

尊奇稲田姫おて本地薬師如來あり此宮山を三山も同じ名
祭神も共小素戔嗚尊奇稲田姫命を本地佛も亦薬師なり彼此合せ

考社ハ寒川神社なるを推知るなり又此社号と二宮と称は二宮ハ神

名帳に位次小て香取と一宮と一寒川と二宮とせし号にや
或云船橋ハ意富小一宮

此社ハ茂呂少て二宮なるをけと延喜式に位次ハ
茂呂神社ハ先ありて意富以神社ハ後なるを

千葉妙見に神事に造り舟と出せり千葉より出ると千葉舟と稱し寒川

舟と出ると結城舟と呼へ結城朝光の母に寒川尼と因り地名なるし

延喜式に比な地名と見ゆ
鴻巣合戦記ハ此社やめつものさひなるまたりゆんとも思ひ
や三川と越てりりよらけ毛の松山や云こと

内野小三山塚と云ありらたなきあるとたつ酒井小三山勘解由と

云家あり地より出し苗字と也

○和名類聚抄小千葉郡に郷名七を載す千葉ハ千葉町山家ハ御山村に

地小や池田ハ猪鼻山に登る坂を池田坂と稱し終ハ千葉と寒川との間小あり

一なるく三枝ハ作草部村精夜ハ
黒河春村云衣類聚名義鈔ハ見ゆ
菰干祿字書見えり俗字はあらはなき
加曾利村な

らん山梨ハ今印播郡山梨村物部ハ同郡物井村な之へとへ小呼屋と井と

錯るハ中昔らむみとをならん
清音ハ

時平明神社 大和田村小あり
往來の北
祭日九月九日氏子村と稱する村四村

所謂大和田萱田萱田町麦丸小なり此等此地時平公庄園と見えたり

幸谷本郷波佐間小も時平公と菅公と合せ祭ると云両公に庄園なと小あり

見ゆ
下野國誌卷四小安蘇郡古江村小時平明神あり
時平明神ハ下總國佐倉領大和田村と云所小も有る

神明社 萱田町小あり此地及萱田村ハ伊勢に御厨の地小て
意富以神社
の條見合へ

神明と祭祀又萱田村に飯綱権現と稱する神なり
毎月廿四日此

本地主動明王
稻荷神社考に廿小飯綱権現と云ハ信濃飯塚山に茶吉尼なり
密宗と稲荷神と茶吉尼天女形小混合せたる上より云出たるなりと

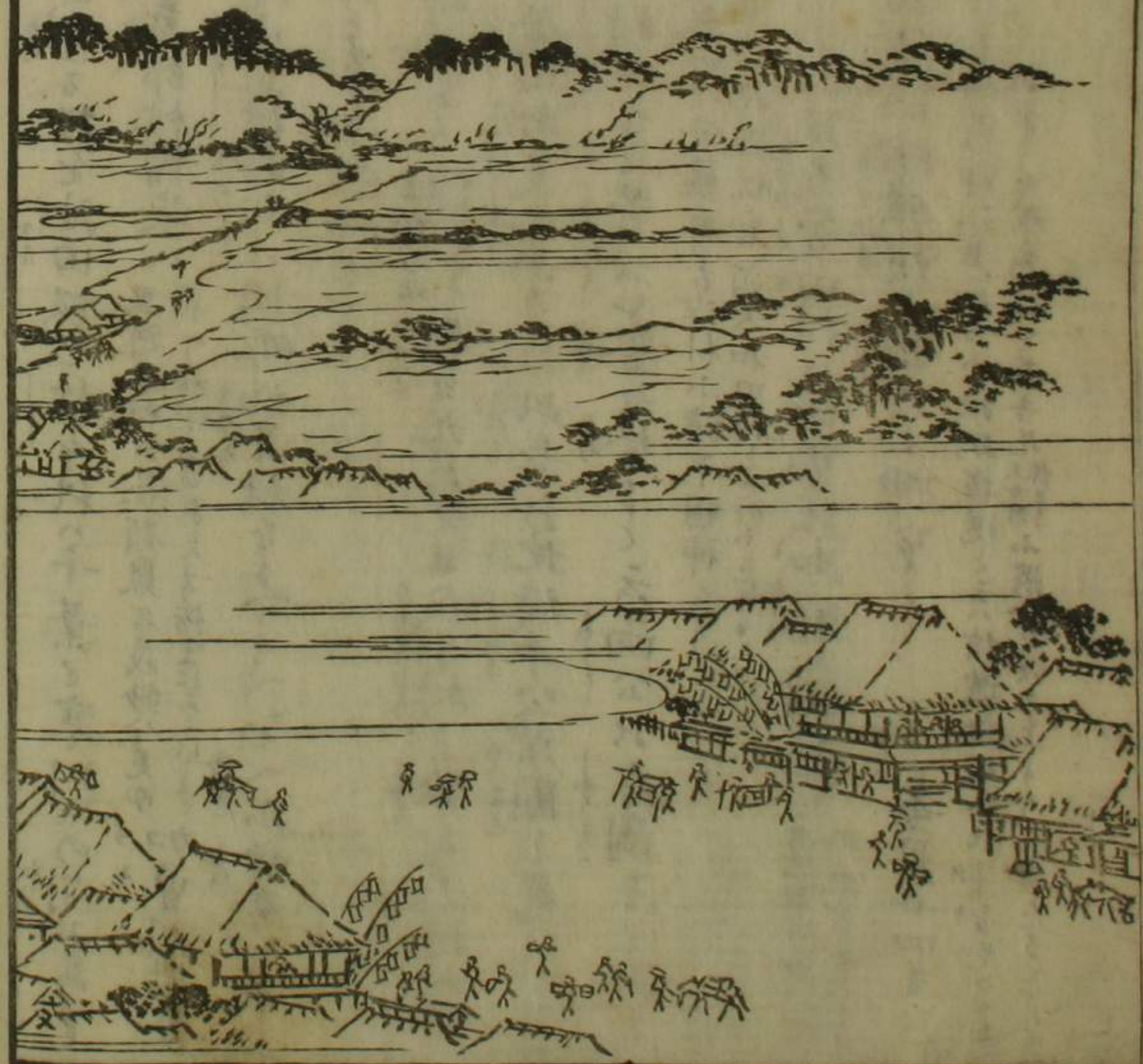
長鼻狐小の
意富

○成田參詣記卷三

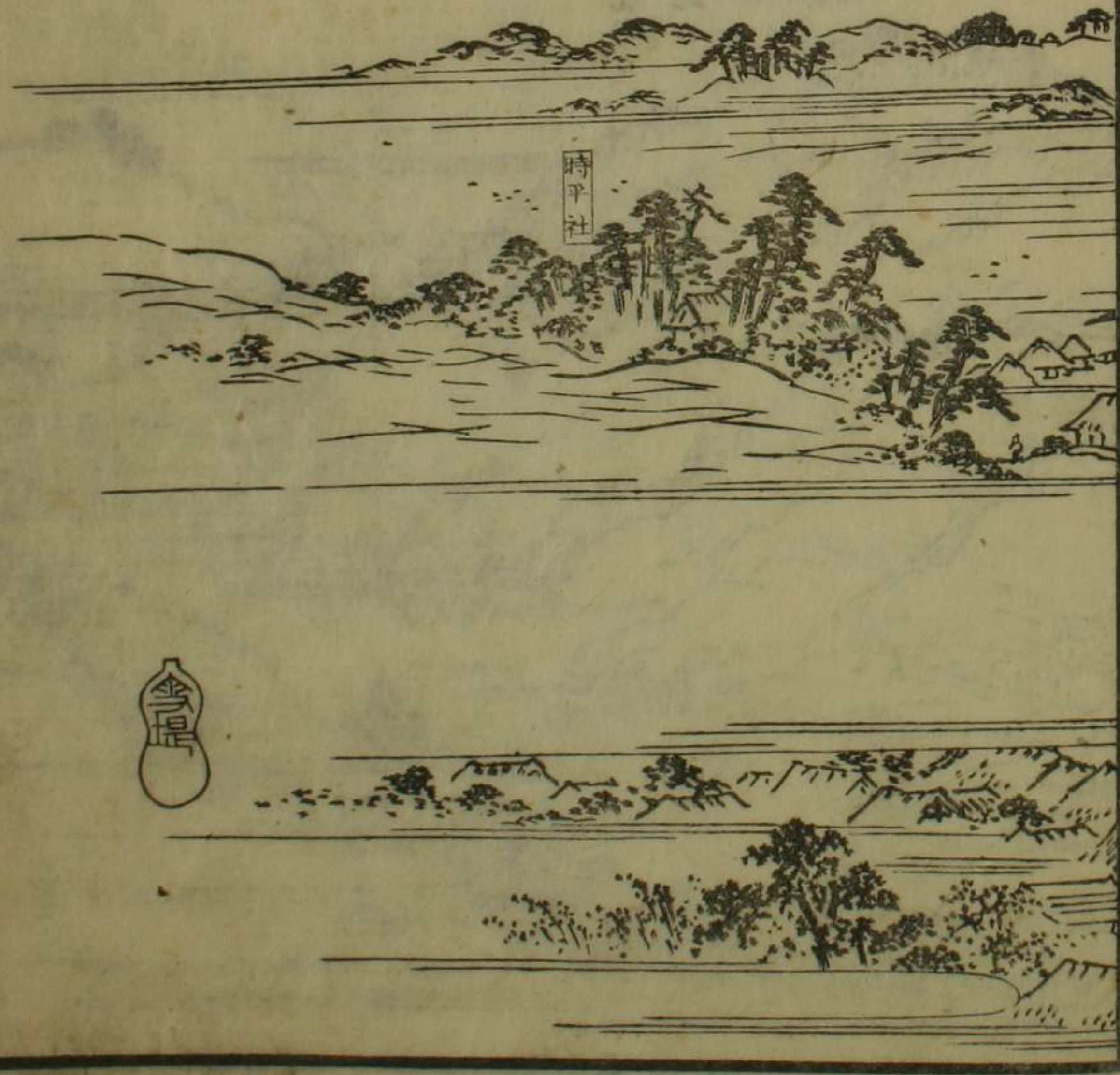
○三十一

お不
とど
大和田
えま
驛の圖

正伯新田ハ本名薬園臺村
ト云昔シ丹羽正伯ト云官医
薬園ヲ取立シ地ナリ其後日
光山へ移サレ今ハ名々存セリ



加賀清水ハ 大久保
加賀守佐倉ニ居城セシ
迷職ノヲリ常ニ愛シ汲
レシヨリ加賀殿清水ノ
名アリト云



印幡沼鑿開趾

惣深新田ふあつとらうの基
 磐と目撃はふ観の如く見
 え色少し黒し所謂楓の本
 をふくし色小黒とあふ埋
 木の故ふくし



惣深新田香取某家所蔵
 埋木基局識

天明年間 官命鑿印波湖之南將
 以達海約齋香取君之祖考率衆平
 山丘貝殼出者許多至高臺而掘地
 五丈巨木出亦多大率毀為新擇其
 善良者一以為書架一則造此局其
 湮晦幾許哉蓋數百年前之物也凡
 材之終不朽滅如此歎

東都北溟陳人記

文化五年壬辰十月一月



加賀殿清水 井野村は原の中ふあり 大和田と井野との間あり 大久保加賀守利常述

職のそり毎ふ此水と賞し飲せし 加賀殿清水と云名と負せたりと云

長谷山宗徳寺 臼井甚町ふあり寺領拾石 天正十九年 禪宗曹洞派陸奥は

永徳寺末より本尊八般若船觀音寺は傳へ應永は昔一原四郎胤高と

云るもの建る所なり元平葉郡北小弓柏崎の地ふあり報恩山と号せし

を天正三年胤高七世は孫式部大輔胤榮小弓臼井は西城を兼并せし

此地は長谷山龍雲寺と云寺合て今の寺号となり陸奥膽澤郡永徳寺二世

巨海は法嗣聖山志賢和尚と清ひて開山たり 礼享元年己酉 堂上小胤

榮 天正十年丙午四月六日卒法 号竜雲院殿弘岳太宗大居士 の子胤義は神主と安史 天正十八年南宣六月十八日卒法 号大賢院殿雲寂道雄大禅室門

又原氏は系系と蔵は城中原胤榮の墓あり

○里老云寺内ふ甘泉あり権現水と稱は菱本は昔一 神君此地小狩せら

れし 此の京師柳はふふ似たりと仰せられ屬日蔭寺は清水と

と御意あり供御は用ふ充せらる 台徳公又台駕とせられ法書

味ありしとふ當時此寺深林は中にあり 日蔭寺は名れし

所蔵古劍

八寸五分



瑞湖山圓應寺 臼井田町ふあり寺領廿石 天正十九年 禪宗臨濟派して京

師妙心寺小屬は本尊八釋迦如來開山と佛真禪師と云寺は傳へ臼井興

胤幼日家難とせし鎌倉の佛國禪師ふより後歸國はる事を得て志津

氏の乱を平らけ佛國は法嗣佛真と清て法寺の開山と云 牌子に圓應寺殿江 鑑行胤大居士貞治

三甲申四月十六日卒中興祖平胤胤と見ゆ 第二世道安和尚

真胤は二男なり 此の領は十か一と寄はし

臼井古城址 臼井村ふあり 今其甚所は徳和と大名宿と云田を寺より 臼井若康

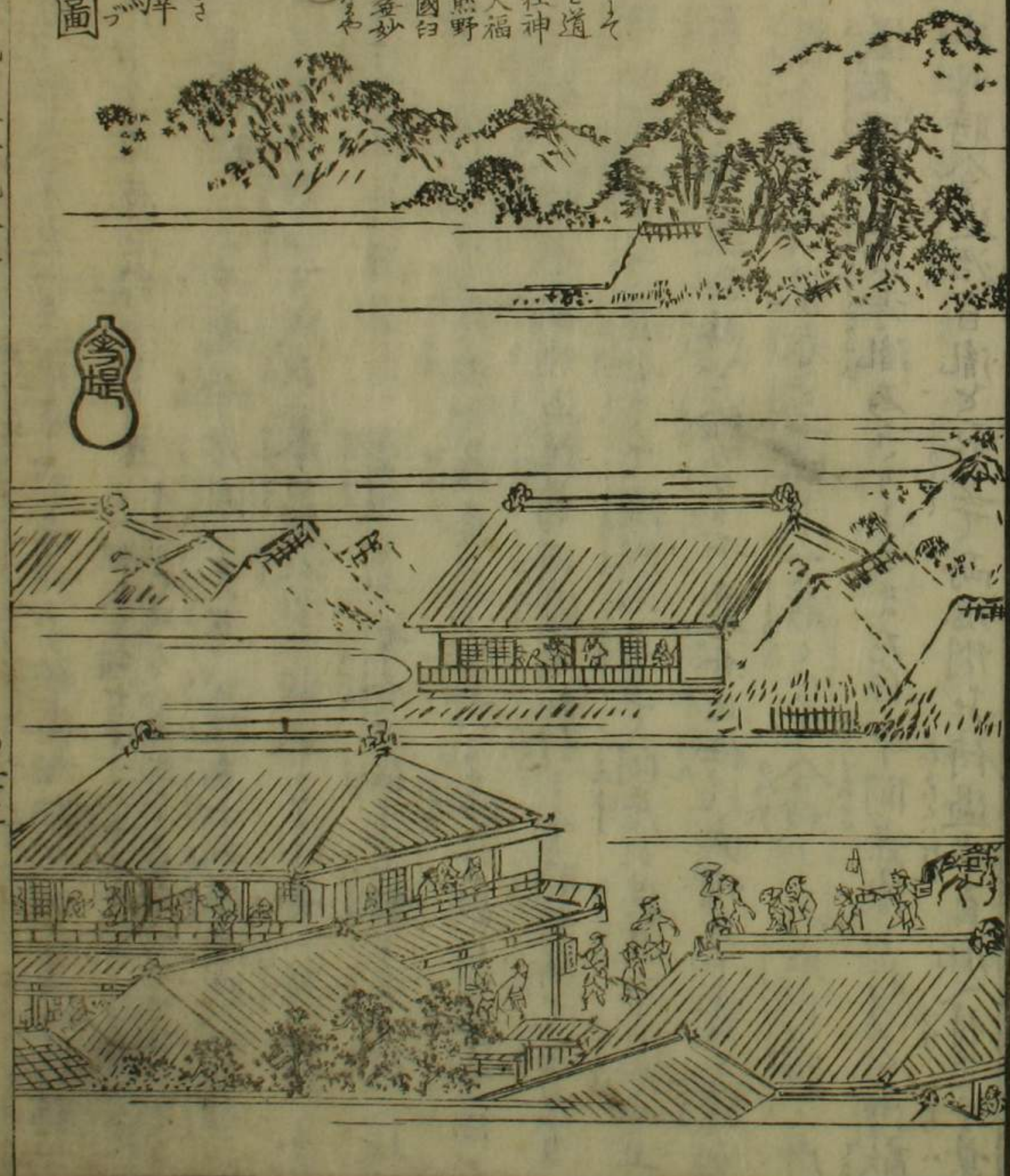
は居所なり長元元年始て臼井に居城と定り 此所謂常兼六黨の一を

白井田町河岸
 オクサヤト云石
 碑アリ興胤ノ
 傳母ノミナリ
 トヲ傳母ハ志
 津ノ三郎ニ寄セ
 ラレシト云



玉勝間小伊勢とて
 他國の奈宮人と道
 者と云へり小慈社神
 鏡沙汰文中に天福
 二年の文書小熊野
 諸の道者下總國白
 井郡の住人南登妙
 房とあり何人否

白井驛
 の圖



王常康の子孝忠常忠の子盛常盛常の子祐胤相嗣て此小居り葛飾印
播二郡の内百十餘村を領せり
○鎌倉大草紙卷下 小千葉介孝胤は先年父陸奥守入道常輝と相付ひ
故胤直兄弟に腹切せ成氏一奉公其人より成氏より千葉一跡と給ふる
々々其後胤直は一跡より實胤と千葉介小任一上杉より下總一指
遣といへとも成氏より孝胤と胤負より千葉より居たり終り間實胤ハ
千葉城入部不叶して武州石濱葛西邊と知行して時氏待て居たり
一の世中と述懐して道玄より濃州より上りて閑居其兄は自胤と上
杉より取たて實胤は跡と給ふる千葉介に任り武州に千葉を號す
今度千葉介孝胤ハ景春一味より所より合戦し又成氏上杉と御
和談は儀不可然之由孝胤志より小さまたけ申間孝胤小杉より河敵
の随一也此時今退治自胤と取立て兩總州に侍過半自胤へ付て千葉

一跡可令相續る為小西上杉より加勢ありて成氏一此より内意をえて太
田道灌下總國國府甚小陣取らるる陣城より入ける同十二月十日孝胤ハ
原二郎木内と先より下總國境根原へ出張は道灌馳向合戦をけ免
終日戦ひくらし孝胤ハ打負て木内原以下悉討死す残意ハ白井の城小楯
籠明文明十一年正月十八日白井の城へ押寄る道灌ハ歸陣して太田國
書助と千葉自胤兩大將より攻戦不とりども寄手ハ小勢より叶は管
領御馬とよせられ可然より望とりのと是を延引し敵ハ要害能くして
力落小難落志くるといふも勢をよけ上總國長南の城主武田三河入
道と免れ終り七月五日降参して自胤小歸服去丸ヶ谷に上總介も
同自胤一降参り下總國飯沼も落城して海上備中守師胤も同自胤一
降参り自胤千葉へ入部はたれとも西總州大形自胤一歸服志けりあ
つた先長陣をたれも歸陣有べしとて七月十五日陣拂はれを見て城よ

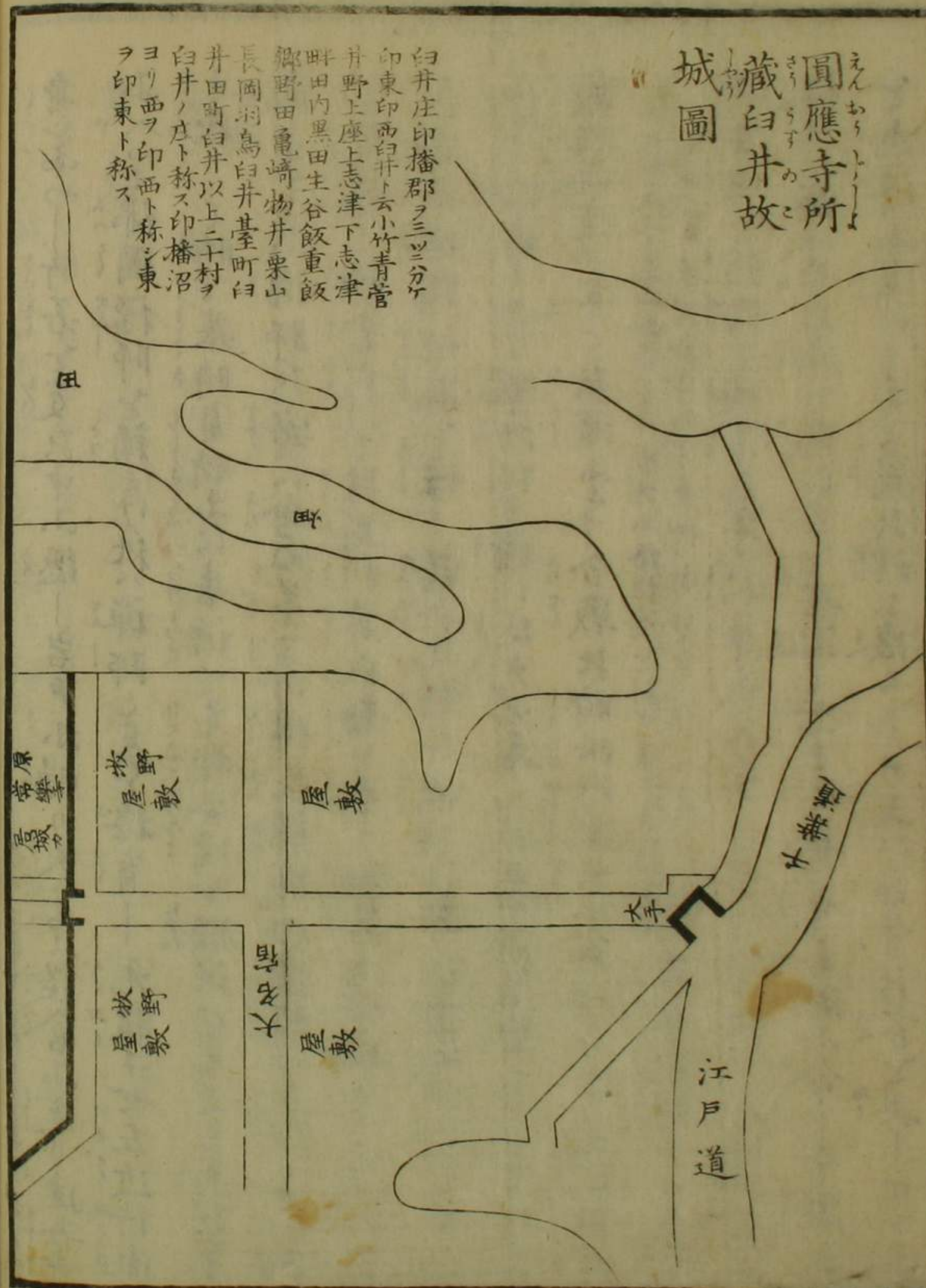
一切に出け行太田圖書助資忠取て之攻戦多付入小打入城と終
小責後及多礼ども太田圖書助と初め僧中納言佐藤五郎兵衛桂経殿
助以下五十三人討死孝胤敗北たると之とそ味方も長陣小勇しつて
之責入らば自胤石濱より開陣す然ると之とも白井城自胤領して城代
とそ忍らる

○總葉概録云常兼の三男白井六郎常康印播葛飾兩郡少て百十餘村
を分ち領して印播郡白井城小主として頼朝卿小屬一勲功あり其
子常忠より四世祐胤よまきて千葉と同く鎌倉山奉仕正和三年
條高時八月七日廿五歳して病て死せし其子竹右生礼て三歳を待たぬ
執権は命きて弟志津城主志津在次郎胤氏と後見とに然るに胤氏義を愛じ竹
若と殺して白井の城を領せんと謀る爰小岩戸五郎胤安命播郡岩戸小在城
軍にて城を圍む胤安手痛く防くと之とも寡兵小衆小敵せしめて家族
こもく亡滅す後小時靈怪あり其寺を建立して西福寺と名く山伏の次女小

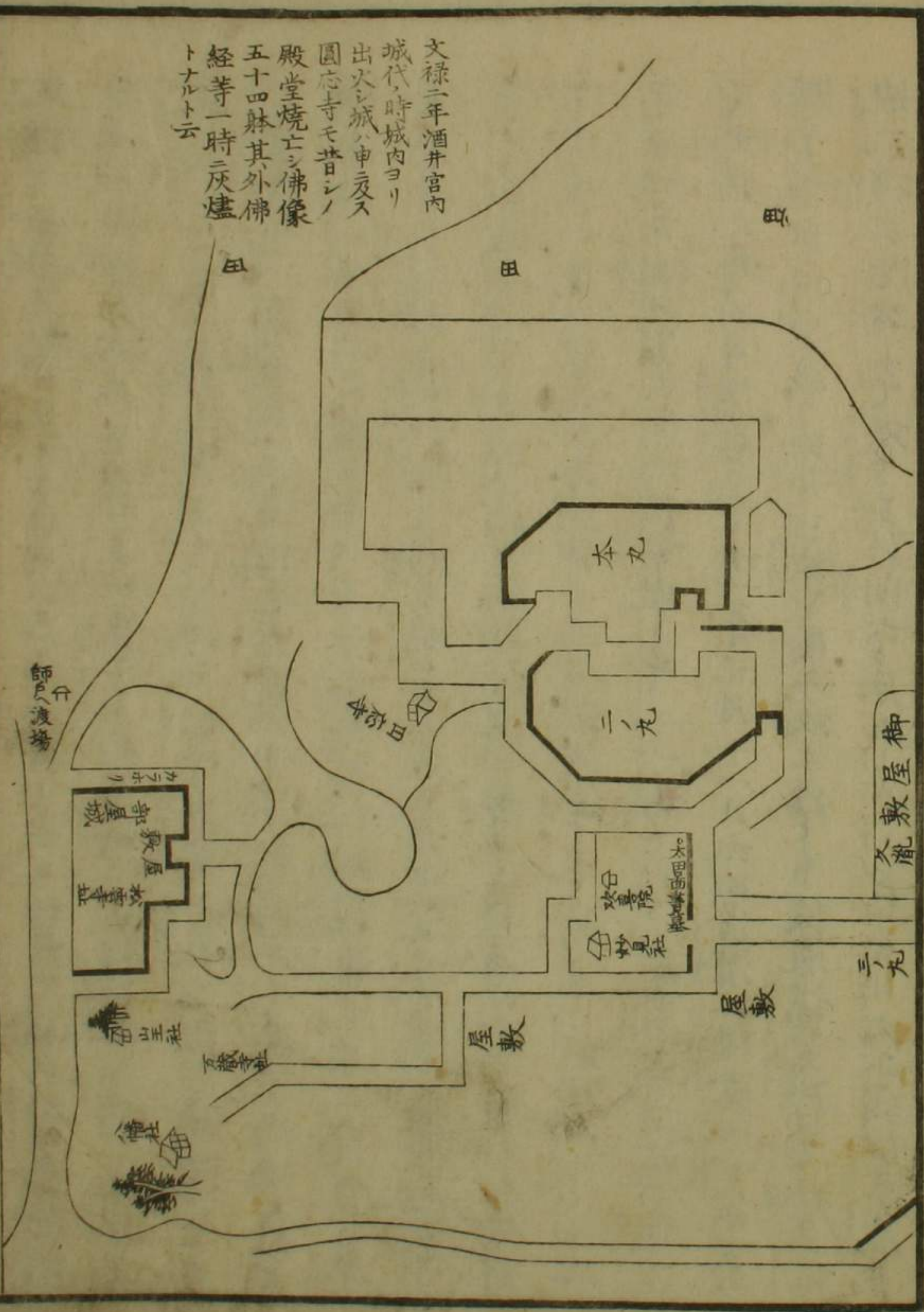
身とつ竹若と爰中隠し岩戸小婦り夫を鎌倉小走り建長寺
小入り佛國禪師を頼りて禪師を授け育し元服して左近行胤
と稱して時々基時貞時共に告訴て本領安堵を願ひけしども未だ事
成らざる小禪師死寂に舎ぬ弟子の佛生禪師の遺囑と受て深く之
と愛懐し鎌倉亡びて後且利尊氏勅と奉て相換次郎時行と討つと
き佛真禪師行胤と催し精兵九騎と従へて尊氏小屬せしむる
より後所より軍功有り特に延元元年二月尊氏築紫小下向し
菊池武俊と多良濱小合戦時此行胤大軍功ありて菊池敗走
太平記を文小此を参考小梅松論と引て多良濱合戦
先陣小千葉大隅守行胤は事ならん
尊氏感悦して本
領安堵と約諾し歴々元年秋尊氏其舉に因て後五位下左近將監小
任せられ白井城を賜ひ名を興胤と改免千葉介貞胤小命して胤氏
と志津小退けしめ其後其神小復らしめ再び白井城を興しける胤

圓應寺所
藏白井故
城圖

白井庄印播郡之三ツツカケ
印東印西白井ト云小竹青菅
并野上座上志津下志津
畔田内黒田生谷飯重飯
御野田亀崎物井栗山
長岡羽鳥白井臺所白
井田町白井以上二十村ヲ
白井ノ庄ト称ス印播沼
ヨリ西ヲ印西ト称ス東
ヲ印東ト称ス



文禄二年酒井宮内
城代時城内ヨリ
出火シ城ハ申及ス
圓志寺モ昔シノ
殿堂焼亡シ佛像
五十四鉢其外佛
經等一時ニ灰燼
トナルト云



氏猶も無禮の事多うけけは三年八月十四日白井の城の隍浚此普精
小託志津兵士率と白井小呼集め其隙と伺て志津此城と圍攻る事
甚急なる亂氏防く事あたらしく自殺す其妻屍骸と抱き城小火と
け其身も共小焚死す貞治三年四月十四日興亂率一其子尚胤これと
継永徳二年十一月三日卒其子太郎冬胤繼應永九年八月廿三日卒
其子長胤繼右衛門佐と稱し永享二年五月十二日卒長子教胤繼初子
なりし故十葉命孝胤の次男四郎持胤と養子と以後小實子とせむ備前
守俊胤と稱し寛正六年五月廿三日教胤率して持胤此小嗣こと十三
年太郎為胤次男左衛門佐幸胤とて二子ありけり家督と俊胤小譲り
て文明九年五月隱居せり十一年正月十八日太田道灌二階堂七堂ホ一第
騎りて市川と渡り白井此城と圍み攻り終りも俊胤謀と設けて防ぎ孝
胤又援兵と出して攻る事間六月小一七月十五日大戦ひ道灌の

兵敗北し舎弟圖書と城中へ討取る圖書の墓白井 郭外に残り十八年二月俊胤家
督成幸胤小ゆつりて退き入道して玄光と号し是年持胤率より延徳二
年六月十九日幸胤十九歳とて死し子なき故孝胤の計らひて俊胤
入道再び城主となす永正十一年正月長子太郎景胤小ゆつり隱居
して同十四年五月十七日卒は景胤は弘治三年十月十五日卒して
其子久胤家督たると左近と稱して年僅小十四歳なりけり此は景胤
病中小に社と患ひ近き縁者ありけり此は原上總介胤貞と指て俊胤
と頼む胤貞心小一物ありて一ヶ月の中十日つ白井に居て郡政ある久
小となく興り行ひ禄と施し諸士と懐け貢税と軽くして百姓と懐け私
恩と施しける故領内此士民自然と胤貞に懐き後て久胤は有る無る其
如くなりゆき城門の傍小宅と營て此小居り今其地は御屋敷と云 部屋城とも云松屋寺
其跡 本城小胤貞住居するに依て久胤は結城小走りて結城晴朝と憑

之歎きけは晴朝百貫地と有左へ十二人圓連判の衆小列に
 白井黒田小塙繁谷鹿窪 後小水谷出羽入道小属して常陸國下館小居に胤貞
 神方残片具是なり 愈威勢を震ひ織田信長卿へ駿馬と献して白井小弓の両城を稱はれ
 祿四年正月里見義亮家臣正木大膳として白井小弓の両城を攻て是を
 取ると同五年貞胤謀と巡らして小弓城を取復は同七年四月十一日白井の城
 と取返す同九年 丙寅この前將軍義輝 上杉謙信白井城を攻る時 甲陽軍
 八永祿二年己未 結城晴朝先陣と請ひ胤貞と撃て久流と復し 功者ありて
 の年の事とに 松慶小居なる故強信に社を悪く多理攻小責りて諸平空堀小居
 松慶小居なる故強信に社を悪く多理攻小責りて諸平空堀小居
 入々なる土居崩れて悉くうたれ社大不敷れて引取る 附城の址あり 胤貞は
 □式部千葉重胤死後見して小田原の城小籠りし小北條滅亡小及り
 天正十九年五月十八日 東照神君酒井忠次と遣り白井城を取
 める小結城へ走り久流は天正二年七月五日下午館して卒 時宗の道

場蔵福寺に葬る三子あり長と將監忠胤と云次と平十郎季と右近村
 胤と云皆水谷家系に生長す忠胤病て仕を罷て死し後なり 平十郎は
 下館と去て攝津國大坂小流落して終る所を知り村流ハ始終水谷家に
 仕て明暦元年十月廿八日備中國松山に卒し 壽覺院と云寺小葬ると
 云 以上概録に細注ハ 志津三郎某用草三郎某師戸四郎某
 松山貞胤説なり 岩戸五郎某白井家四天王と稱すと云

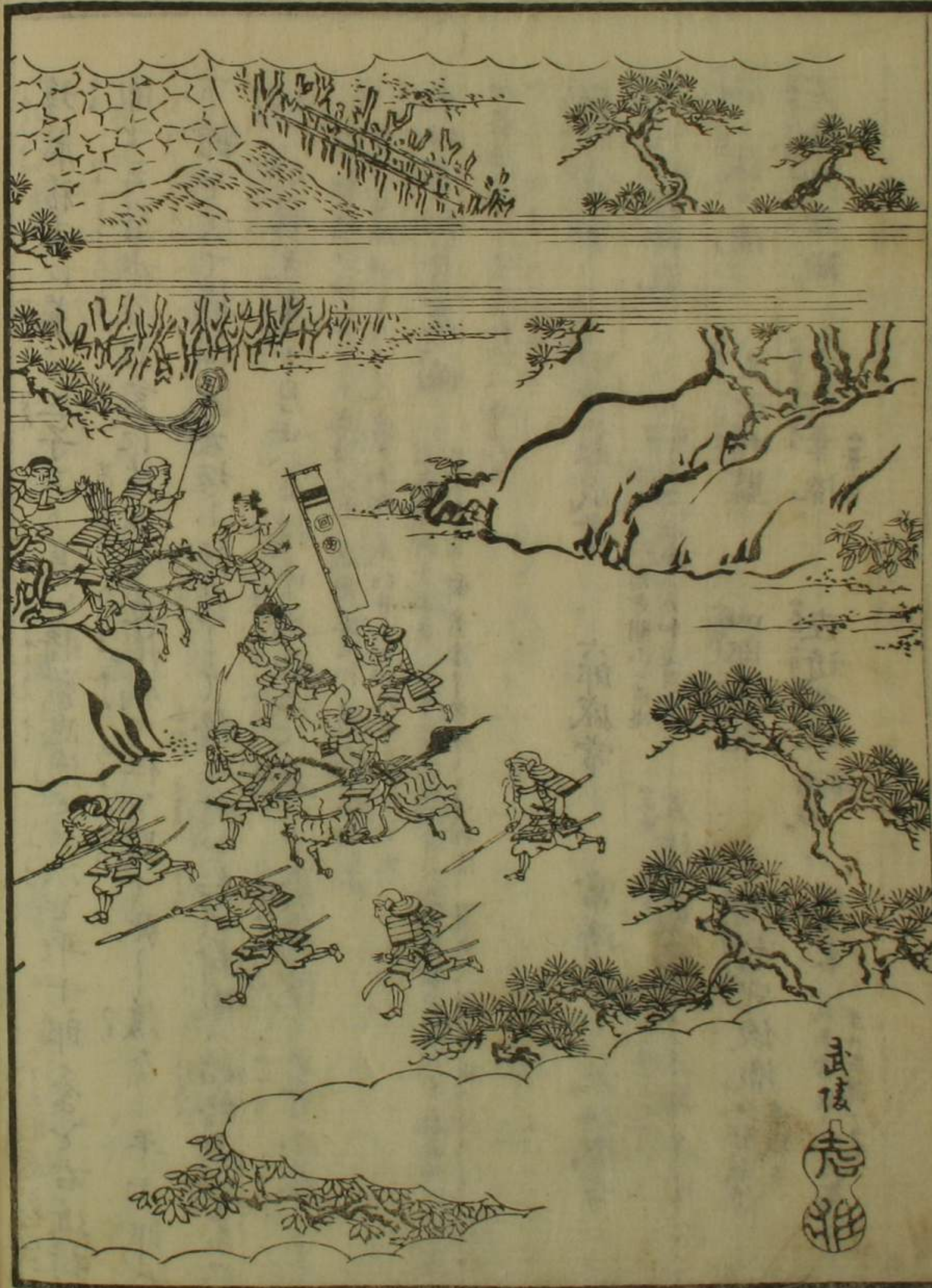
○玄仙本白井系圖

平益胤立之トアリ玄仙本へ年月ヲ
 記セシハ牌子ニヨリシナリ

- 白井常安 田井二郎成常 六郎盛常 常清 太西胤常
- 左近將監胤 某 瑞湖山田應寺開山之道庵 左近將監包中 太郎冬胤
- 石く佐之胤 左近將監 四郎持胤 備前守俊胤 入道後直
- 左衛門幸胤 太郎幸胤 左近久胤 結城三子 以下畧 此系常胤ヨリ與胤ニ
至ル間詳ナラス



上杉謙信白井
城攻の畷
生谷村三十塚ト云アリ
此地杉謙信ノ附城
址アリト云



武後志

諸國廢城考 臼井城文明十一年七月太田道灌攻てあはれと陥る城之 永

祿七年三月上杉輝虎當城小奈向以城主原武部大輔ハ九代後記作上徳介

千葉介國胤近臣より累世此城小在るる輝虎近日奈向より由

聞えけし千葉介より推津権名以下數百騎小田原よりも松田孫太郎

并与力引具して楯籠る去程小輝虎衆可田柿崎内藤長野太田美濃守

其子權原と始として唯一もみもも後せと一旦小取寄攻られける城中

アも突て出で散る小戦々々越後勢數十人討たれはあけ具と吹て

人數と繰入る處小城より追うけ突て出越後勢と追立切て廻る武部大

輔も是と見て城と拂て突て出々此々敵散るに突立られはうく布

陣へ引返り輝虎此有様と見て叶くこや思ひけん頼て人數と引て

打入る天正十八年五月豊臣秀吉諸將に命じて此城を攻む武部大

輔支拒るる叶は遂不出て降る十九年神祖酒井左衛門尉家次

衛門尉家次日記宮内太輔今迄行實録と本封此城小居て三茶石と食む慶長九年家次

と上野高崎小改め封はと云く古戦録永祿七年三月四月小作り原武部大輔

五百餘兵と添て二の郭を守らむ大和田塔小ハ南方松田孫太郎康郷

太田圖書墓 臼井村歡喜院と云寺の辰巳此方見ゆあり寺前小

八幡社 天神社 共小同所小あるを里老云臼井興胤足利尊氏小説て菊池と

筑紫國多々羅濱小戦いとり筑紫兩社小祈り名ありは此ハ二社とこの地小景祭

一権と樟と宇佐より持来り八幡社に植ると云山玉社小も老楠あり田野山崎原

ふ共小其時おもものなり印西より多々羅材あり興胤多々羅濱の事に因り

村名より瀬戸村に宗像明神社あり是を筑紫より移り祀るを云と云

八幡社前石燈籠識 奉寄進願主 臼井村願主 平宗憲男 川口宗建

八幡宮御寶前石燈籠 寛文十三壬子年十月十五日

成田泰詣記卷三

四十二

外一基ハ平宗建室藤原氏女ト識セリ 川口家ハ元此地、地頭ナリト云今深川六 軒堀川口熊五郎高千七百石此家當時 八幡社領若干寄附セリト、陣屋址 臺町ナリ墓ハ寶蔵寺ナリ



白井山王社老楠の圖 周圍五丈餘
 相傳延元元年白井興胤筑紫ヨリ
 持來り植ル所ト云



本覺山淨行寺所藏机識

日蓮上人像（應）モリ法華經八卷アリ

白井（由）山光勝寺ト云時宗ノ寺アリ此寺ニ關王像アリ首（中）識アリ云此御首小野篁作也光勝寺ミト見ユイカナルユエニヤ或記ニ常祐代遊行ニ代真教上人下総ノ四國有シ時歸依シテ光勝寺ヲ建立ス云佛舍利一粒アリ日什丈所傳ト云其大ヤ推子ノ如シ

下総國臼井淨行寺住物時代日胤

奉奇進佛經拾部并机拾福二壺成就祈者也

大願主原越前守泚内施主教白

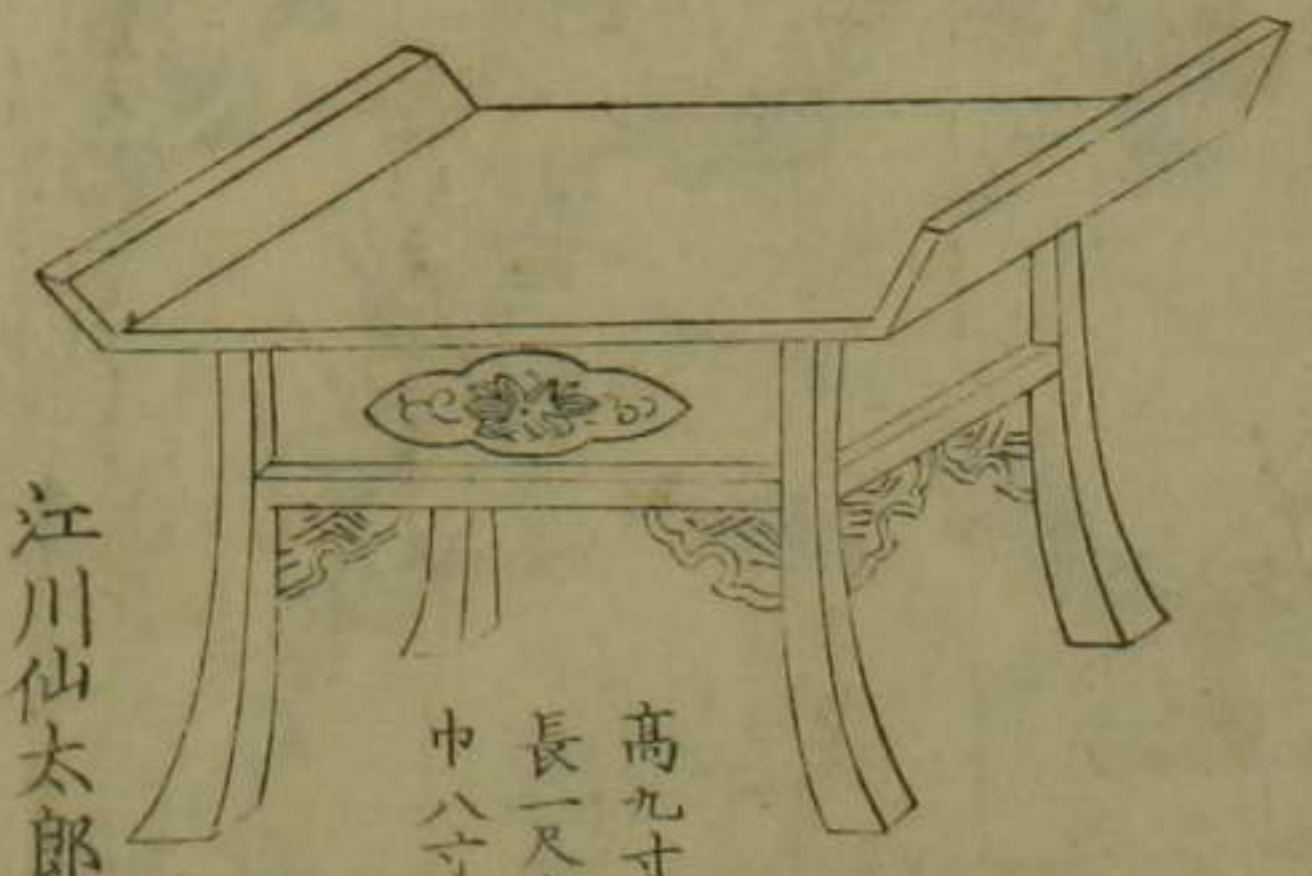
六月拾貳日

日蓮上人像臺裏書

天正十年八月二十二日

原越前守泚之

成田參詣記卷三 終



高九寸五分
長一尺六寸
中八寸八分

江川仙太郎刺

